

内藤礼

生まれておいで 生きておいで



Rei Naito: come and live - go and live

内藤礼

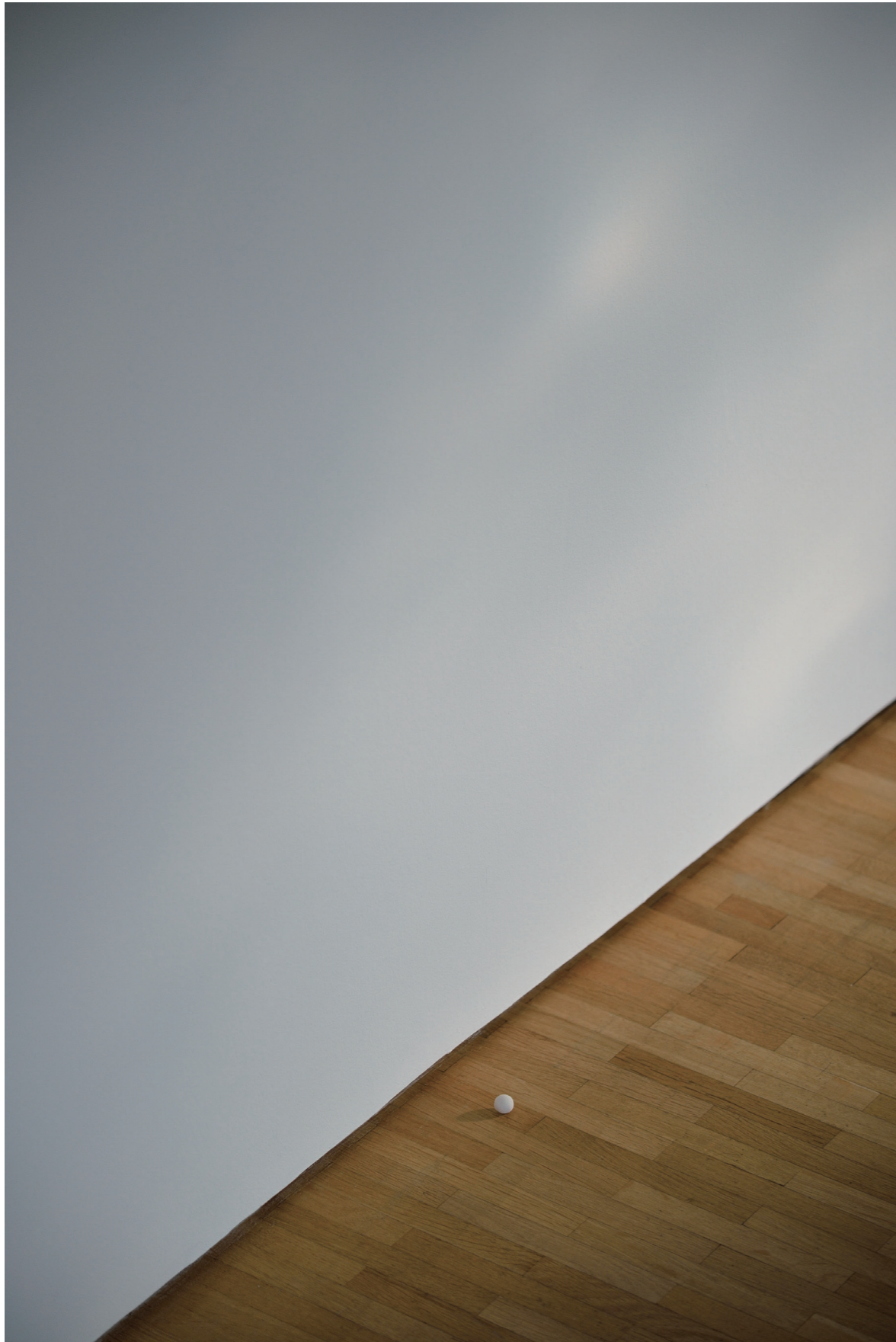
生まれておいで

生きておいで

Rei Naito: come and live - go and live



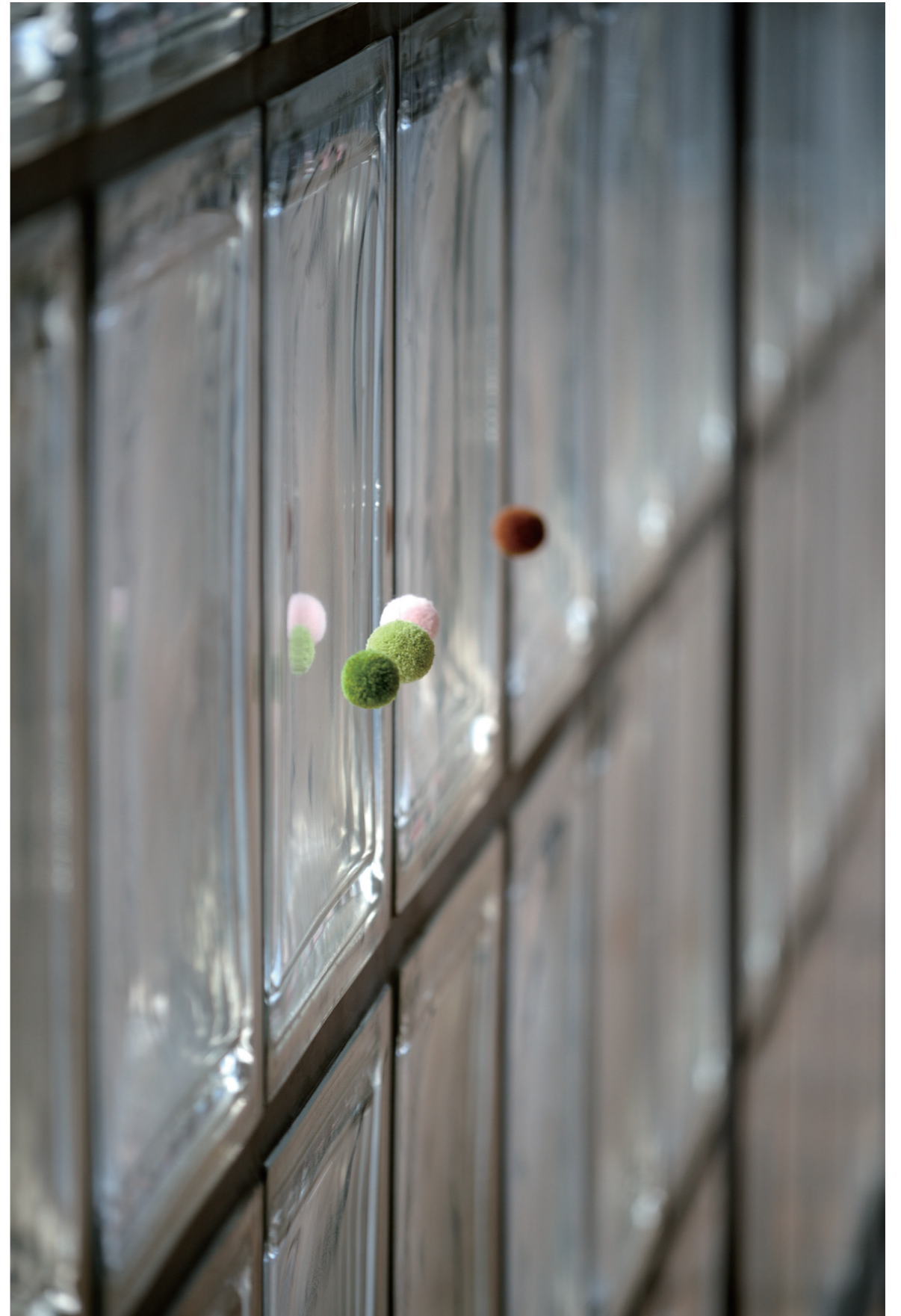




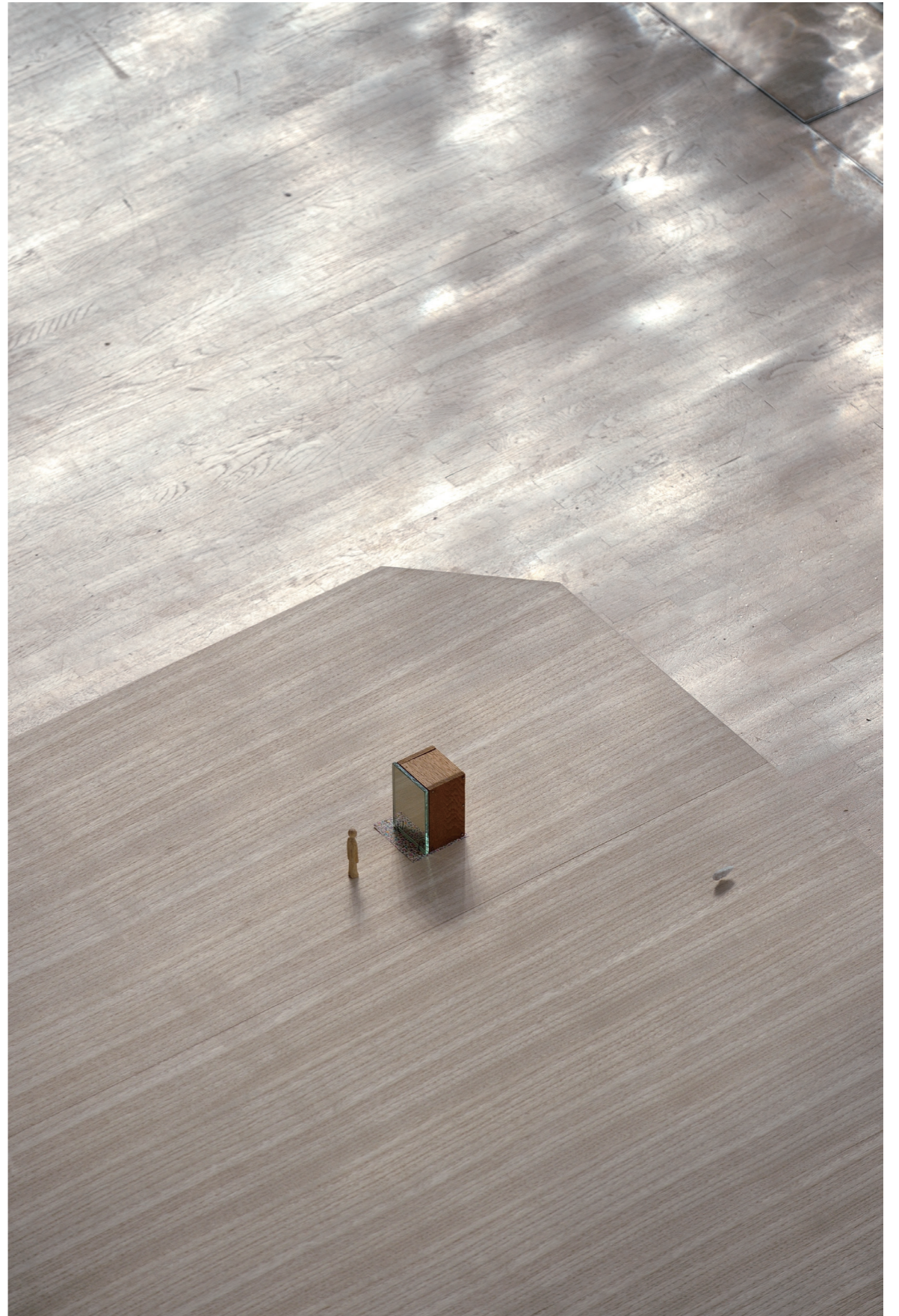






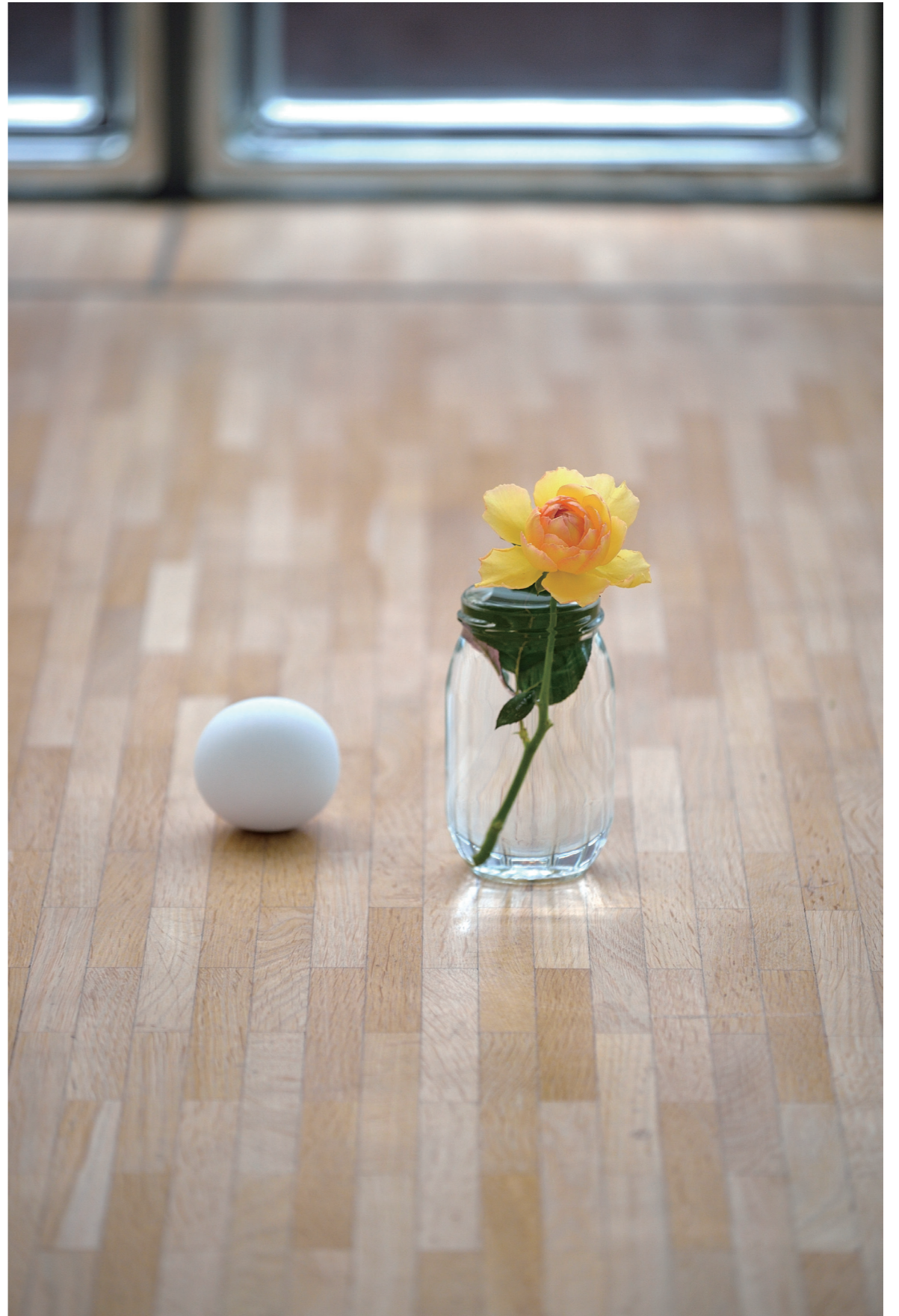






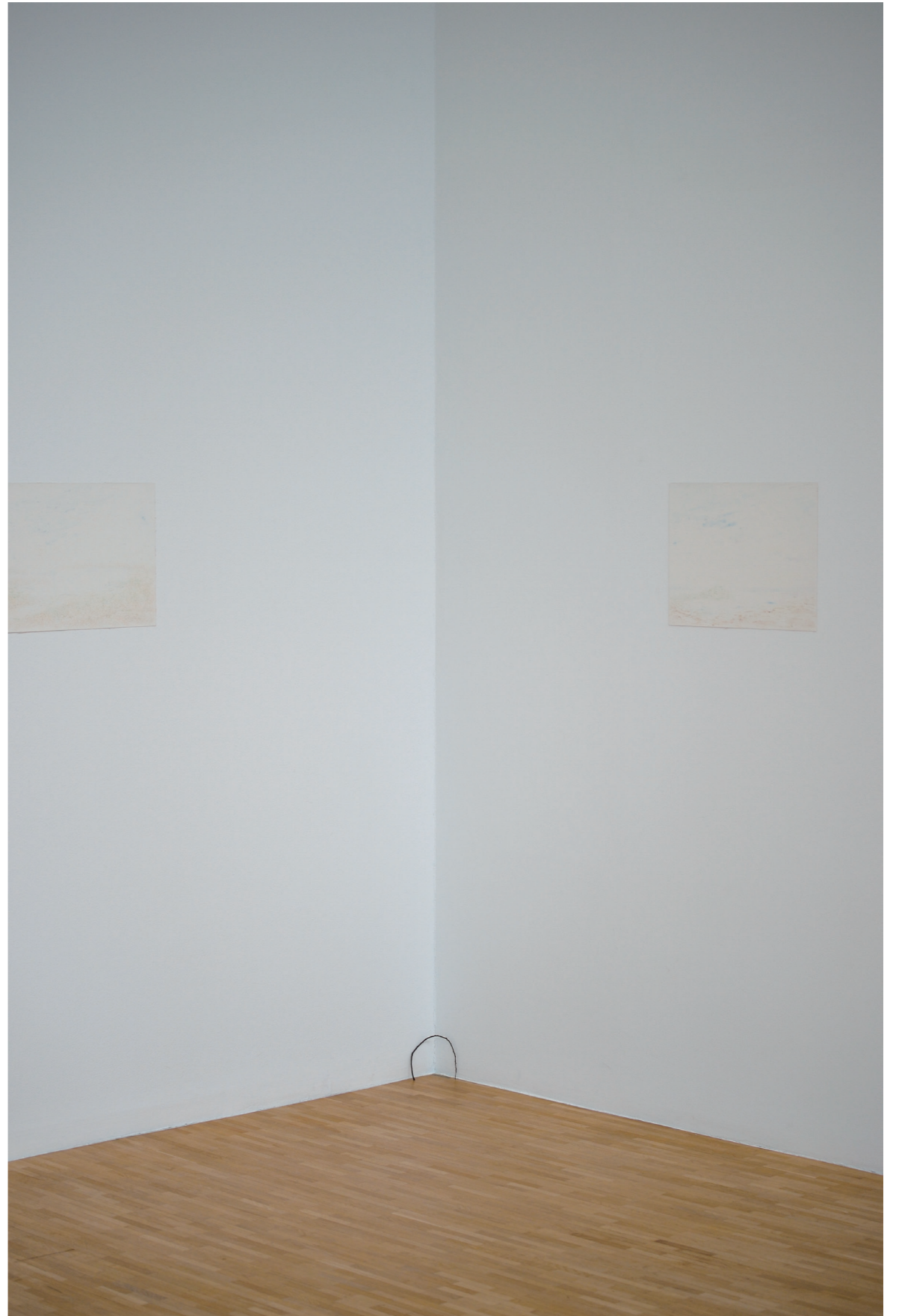




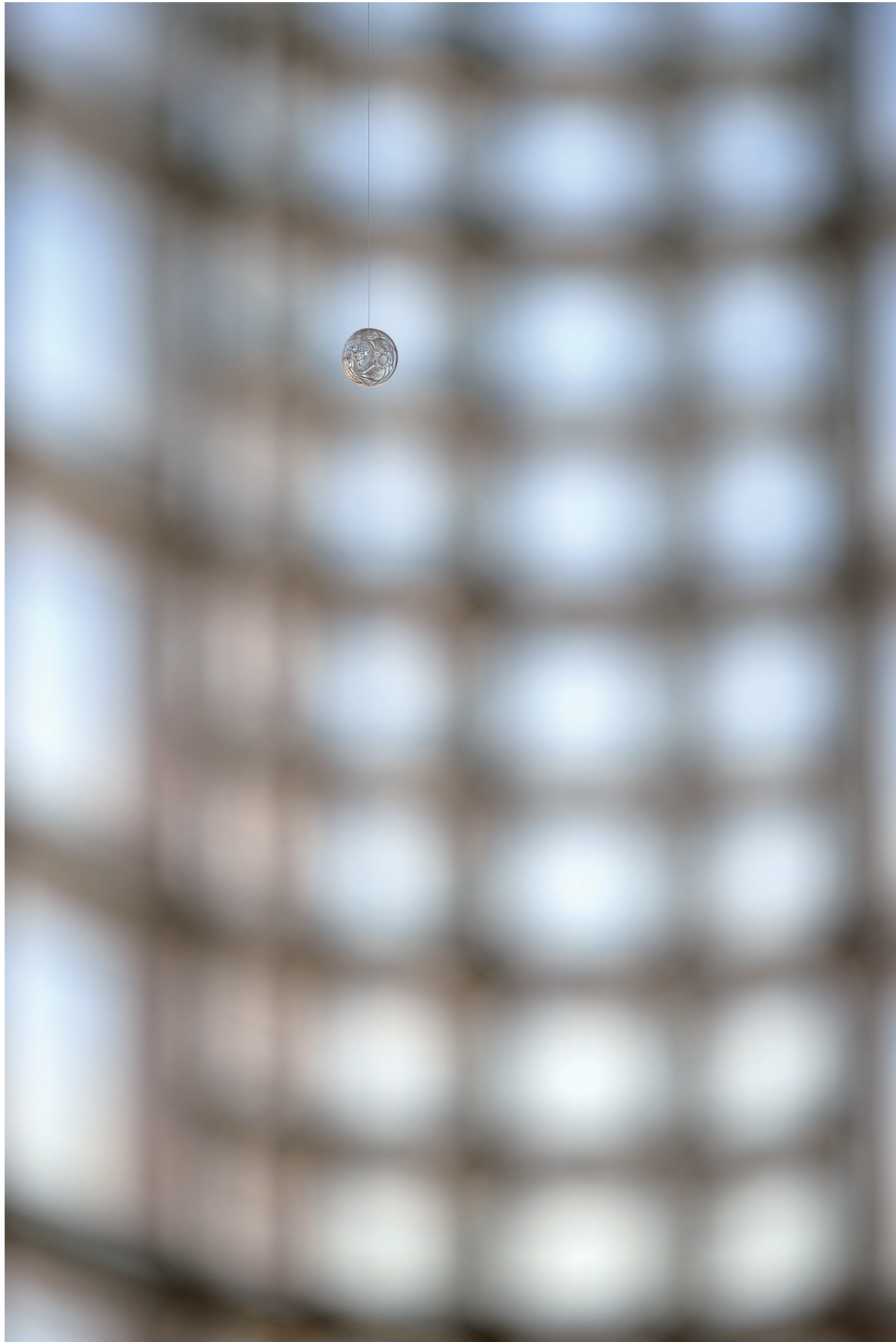


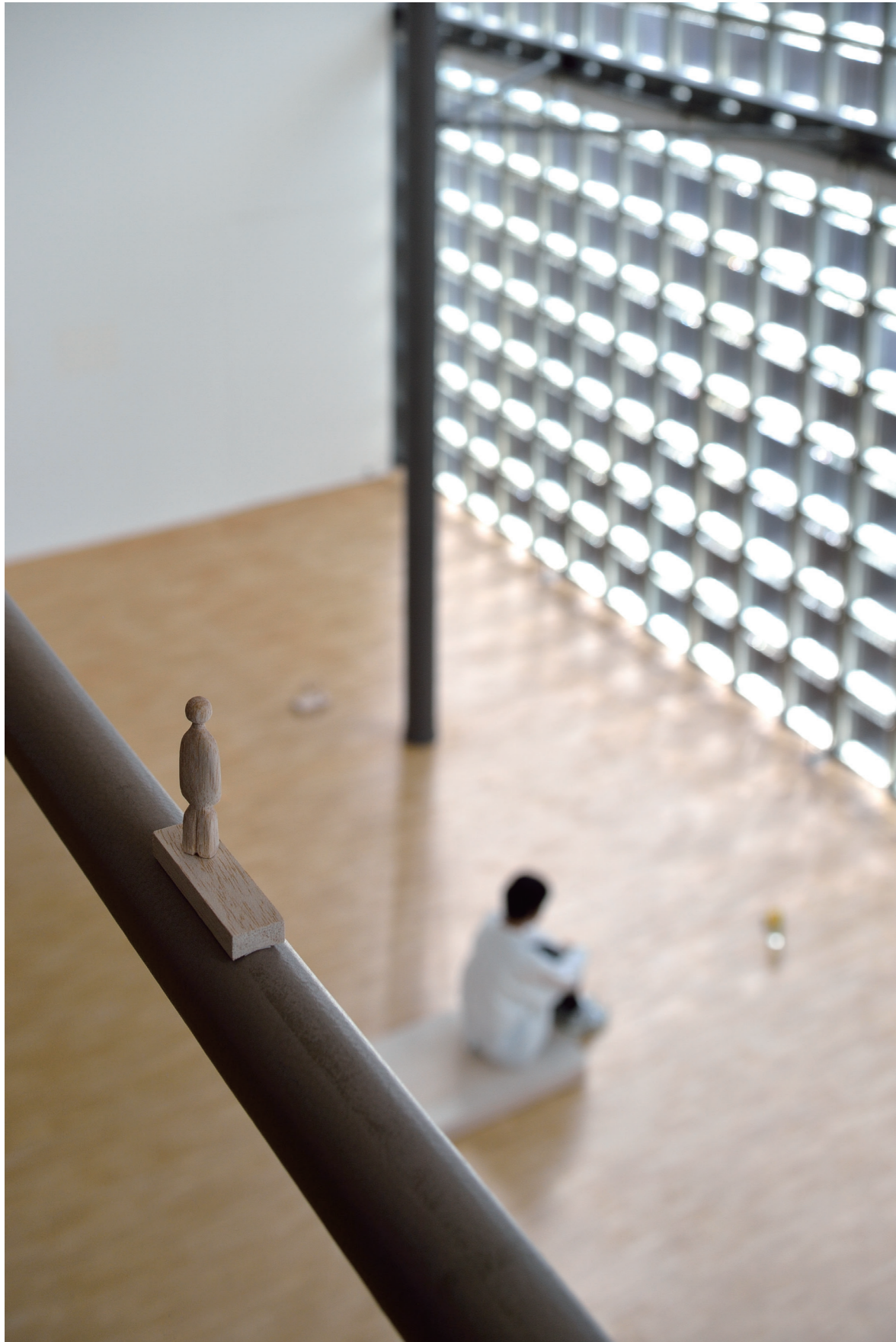




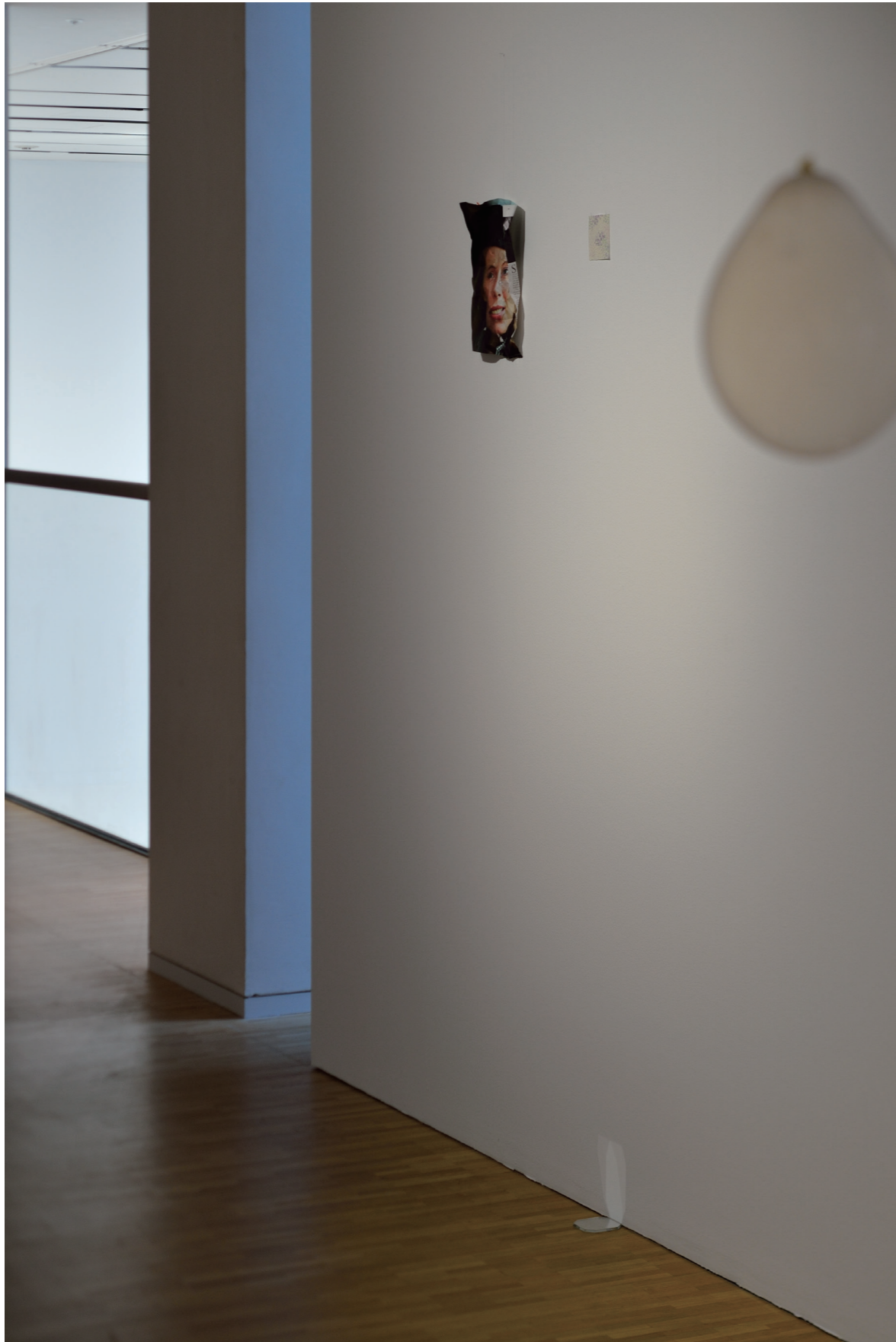




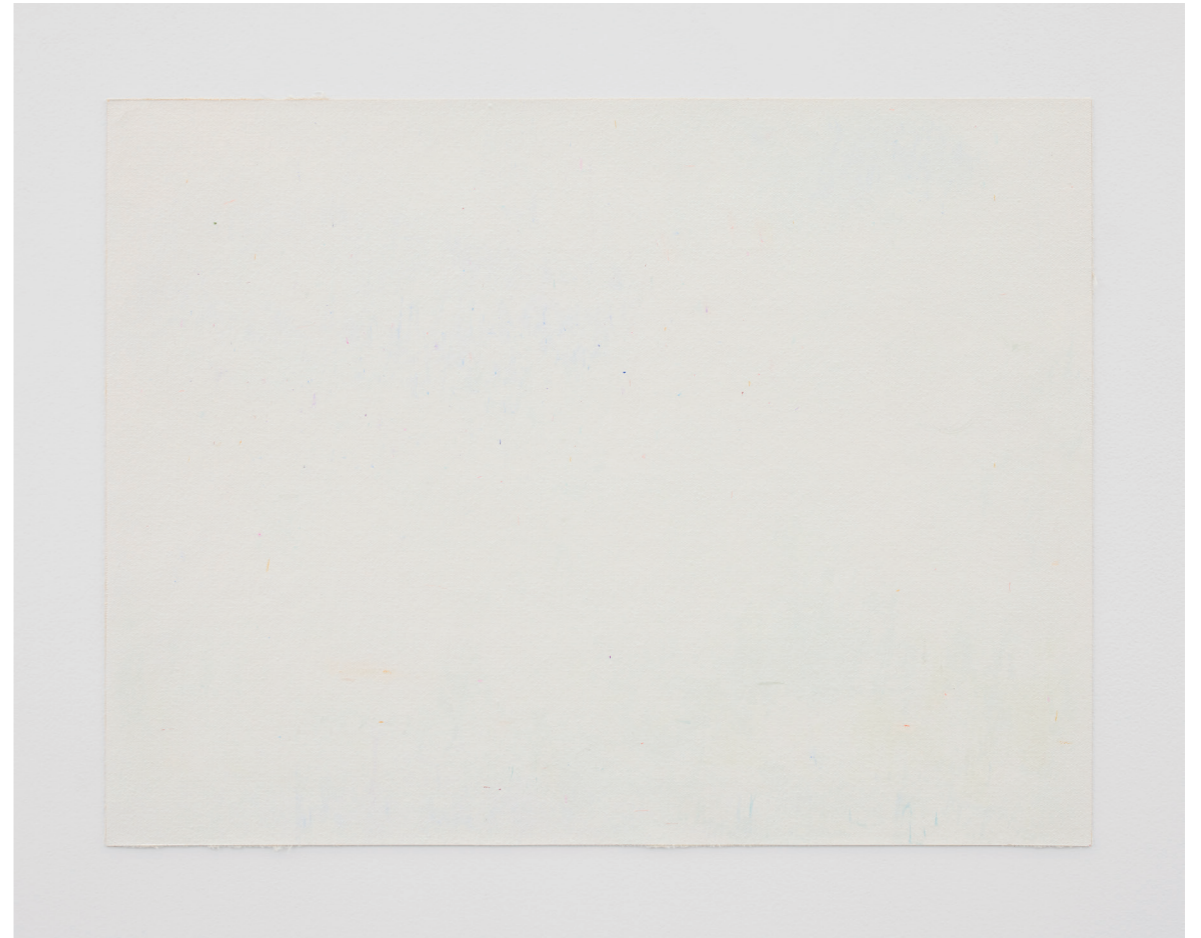
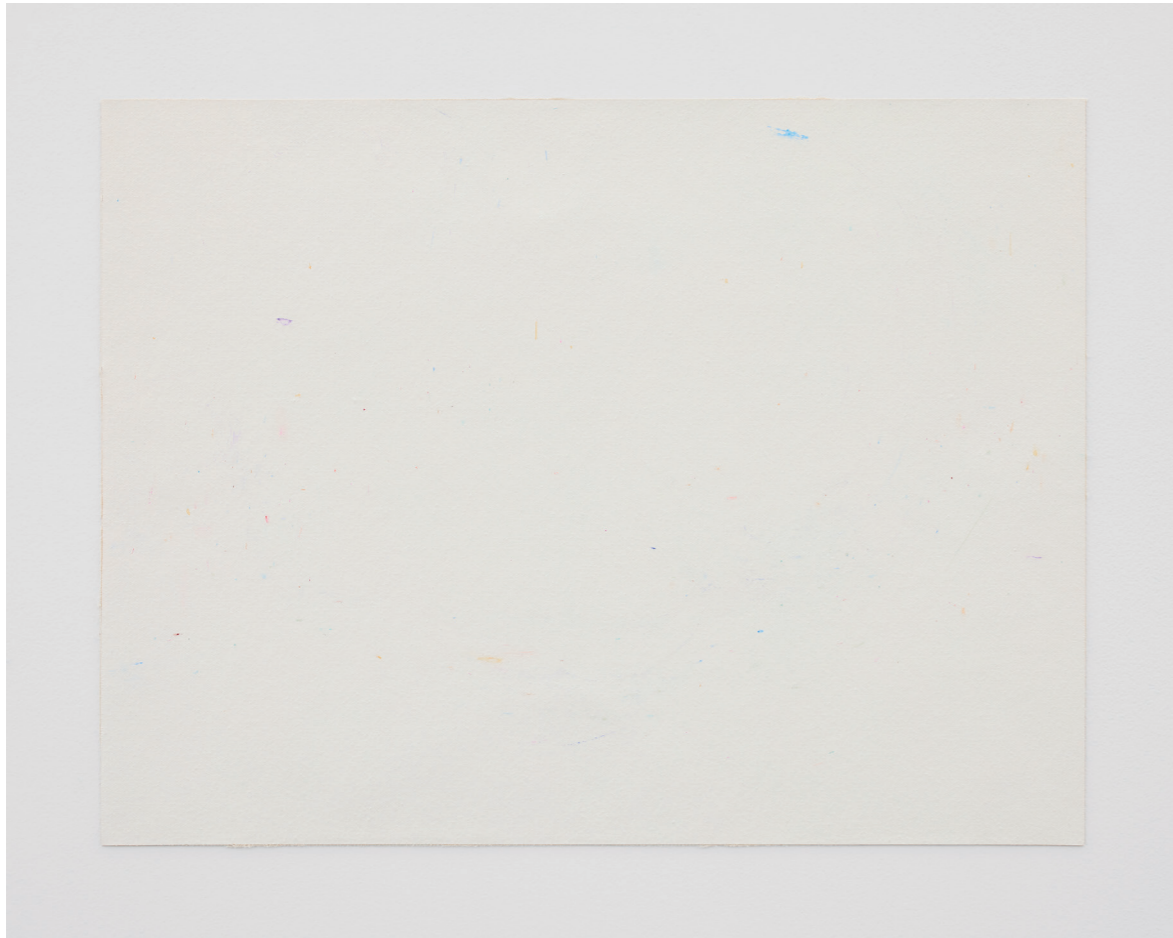




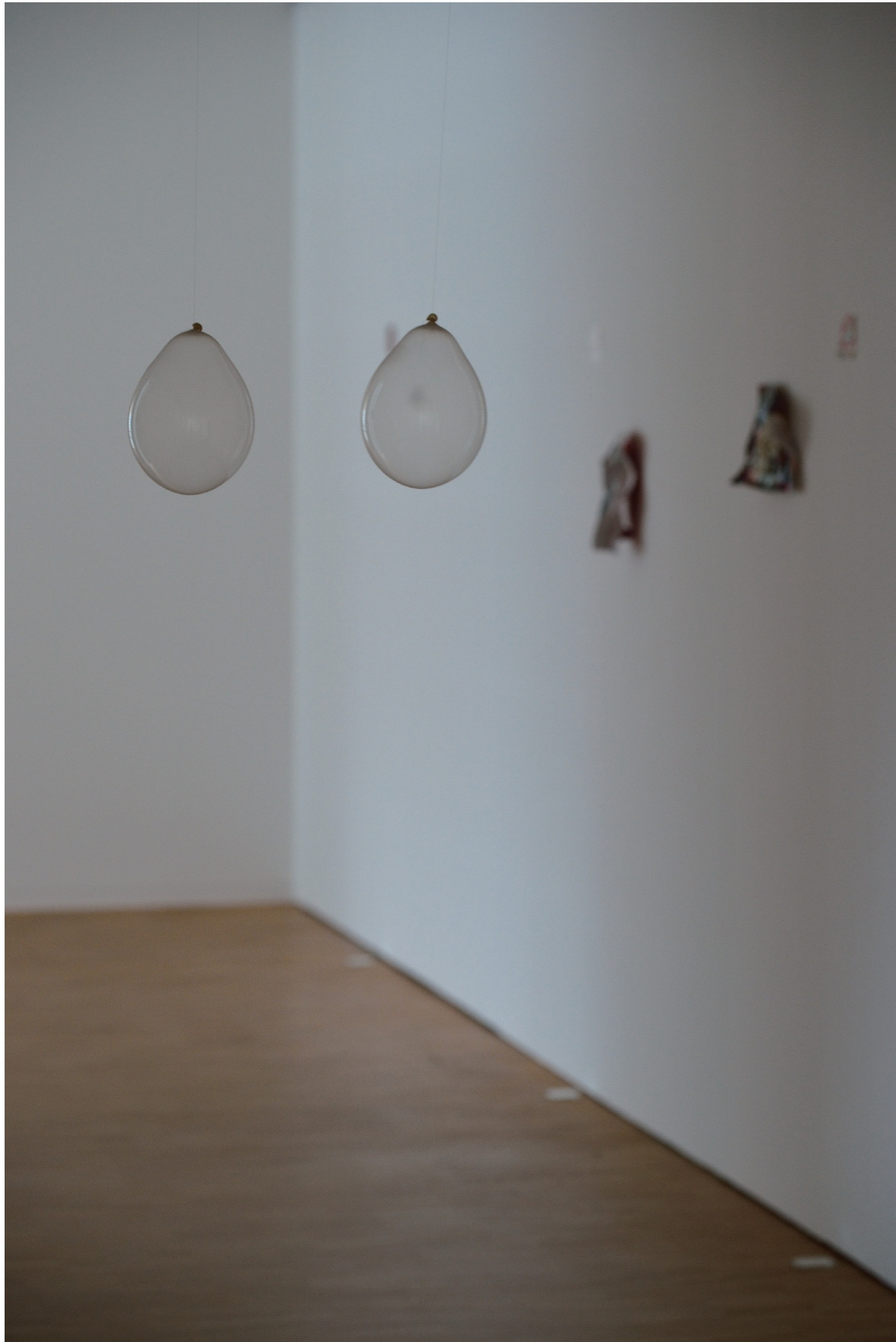












そこにいたのは人だった
ひとりひとりのあなたは 不意に

あなたではないものに近づき ものとしずまり

小さくかがんで ものに顔をよせ

ひかるものを仰ぎ ひらいた手を伸ばし

立ちどまると まなざす
あなたではないものを あなたではない人であるものを
じきに ものたちは変わっていくだろう

葉のあいだを 風
鳥の呼び声
波打つ梢

あなたは永く 遠かった
いくつもの影を連れ立ち 通りぬけていたのかもしれない
あなたはわたしより先にそうして
わたしがいなくなってもそうしている
わたしは尋ねただろうか なにを見ているの

生はなる
こころのうちの たったひとつではない生は 生になる

その眼を見つめたかった

There were humans there
Each and every one of you all of a sudden

Come close to a thing that is not you and be still with it

Crouch down with your face closer to a thing

Gaze up to a thing bright and shining,
Reach out to it with your hands wide open

Pause and look at a thing that is not you
a human that is not you
Soon they will change

Wind blows through the leaves
Birds coo
Treetops ripple

You were eternal and distant
Maybe passing through places with many shadows in tow
You have done it before me
And will still do after I am gone
What are you looking at, I wonder

Life becomes
Life within our hearts that is not only one become life

Let me look into your eyes

エルメス財団は、今秋、「内藤礼 生まれておいで 生きておいで」を開催いたします。
「地上に存在することは、それ自体、祝福であるのか」を、一貫した問いとして作家活動を続けてきた内藤は、光や影、水や大気のうちろいがもたらす生と死のあわいに、日々見過ごしがちなささやかな事物や情景、知覚しがたい密やかな現象を「根源的な生の光景」として、私たちの中に結び付けることで、深い体験をもたらします。

本展は、東京国立博物館にて、2024年6月25日-9月23日まで開催された同名の展覧会と一連の流れを持って構想されたもので、会期を一部重ね合わせながら、ひとつの大きな円環を描くというかたちで展開いたします。

歴史ある建築物とさまざまな年代に制作された膨大な文化財を所蔵する東京国立博物館の環境とは対照的に、銀座メゾンエルメスの近代的な建築内にあるフォーラムには、ギャラリー所蔵の作品群はありません。都市の中心部に浮かび、一見、空っぽのようにも感じられる空間は、ガラスブロックを通じた自然光とともに街からもたらされる人工の光や色彩に満ち、また過去から隔てられた場所でもあります。内藤は、光のうちろいによって、一層はかなく、また色濃く感じられる生への眼差しを、この場所へかりそめに宿らせ、そこに「生の没入」を見出そうとします。

連続する二つの会場は、絵画や立体作品によって繋がる構成をとっています。とりわけ、2023年から24年の間に日々作家のアトリエで制作された絵画〈color beginning/breath〉のシリーズは、展覧会へと向かう作家の生の刻として、物理的な時間の不可逆性を示し、両会場を結ぶ円環の語りの一軸を形成します。

東京国立博物館で縄文時代の土製品や獣骨と出会い紡がれた親密な時間やままごとの痕跡、数々の展示室を巡る回路からもたらされた記憶、それらは、会期を完全に重ねることのない本展においても、作品の断片や空気、眼差しの間に交差する時空を形成し、空間に佇む人や低い位置に設置された《座》に身を寄せる人の姿を通して、超越的な協和を浮かび上げさせます。

過去に生きた人に出会うことができないように、未来に生きる人にも、昨日や明日という時間にも、私たちは今、物理的には出会うことはできません。だからこそ、内藤の「生まれておいで 生きておいで」という呼びかけが鑑賞者の地平に現れるとき、太古から続く自然や命への畏れや祈り、それによってもたらされた創造の力や精神世界への共鳴を、風景の中に認めるのでしょうか。そして、未来へ向かういかなる生もが、慈悲と祝福の息吹で満たされんと希求するのでしょうか。

The Fondation d'entreprise Hermès presents the solo exhibition “Rei Naito: come and live – go and live.”

Rei Naito's work consistently explores the question “Is our existence on the Earth a blessing in itself?” She views elements of nature, the humble objects and scenes of everyday life, and elusive and easily overlooked phenomena caused by changes in light, shadow, water, and air as “primordial scenes of life,” and by connecting these forms within the viewer, she invites us to delve into our own states of contemplation.

This exhibition is conceived in concert with a synonymous exhibition that was on view at the Tokyo National Museum from 25th June until 23rd of September, 2024. The schedule of the museum exhibition partially overlaps with that of the Ginza Maison Hermès Le Forum exhibition, and the event as a whole is presented so as to form a great circle by integrating various elements and themes.

In contrast to the Tokyo National Museum, whose historic buildings house a vast collection of cultural properties from different eras, the Forum is located in the modern Ginza Maison Hermès building and does not have a permanent collection. Situated in the heart of the city, the space appears vacant at first glance, but is in fact brimming with natural light filtering through glass blocks and artificial light and colors from the urban environment, marking it as a space apart from the world of the past. Naito seeks “immersion in life” by letting the gaze reside temporarily in this space, as she directs our eyes toward life rendered even more ephemeral yet intense by the shifting light.

The two venues are linked through an array of paintings and sculptures. Notably, the series of paintings *color beginning/breath*, which the artist worked on continually in her studio from 2023 to 2024, is a moment-to-moment chronicle of the artist's days leading up to the exhibition. It highlights the irreversibility of physical time, and forms a narrative axis connecting the two venues.

Although the two exhibitions do not fully overlap, a moment in space is formed from the intersection of fragmentary artworks, atmosphere, and gaze that arise out of the intimate encounters with prehistoric Jomon period earthenware and animal bones at the museum, vestiges of pretend play, and the memory of the route through the many galleries. A sense of transcendent harmony is manifested in the figures of people in the space and on the low seat.

Just as we cannot physically meet people who lived in past eras, we will never meet those who will live after we are gone, or even engage with the times we call “yesterday” or “tomorrow.” In this transitory state, when Naito's invitation to “come and live, go and live” emerges on the viewer's horizon, it may allow us to perceive in the surrounding scenery the awe and prayer directed at nature and human existence that has persisted from ancient times, as well as the creative energy and spiritual realms these have fostered. And all life, as it moves toward the future, may hope to be filled with the breath of mercy and grace.

説田礼子（キュレーター）

内藤礼の作品と分かちがたく結びついている時間の流れは、展覧会という現実の中にゆるやかに現われ、幾ばくかのあいだとどまり、いつしか消滅しながらも、私たちの身体の中に持続的なあわい光と空間をもたらす。

上野の東京国立博物館（以下、東博）と銀座のメゾンエルメス フォーラム（以下、フォーラム）という二つの場の円環の中で生きる「内藤礼 生まれておいで生きておいで」は、「地上の生の光景」を私たちに届けたのちに、再び自らの生の中に息を引き取ってゆくのだろうか。本稿は、作家が「生の没入」と呼んだフォーラムでの展示を解題しながら、会期のうち一部、17日間で重ね合わされた構造から見出されたすがたを書き留めておこうと試みるものである。東博での展示については、同博物館の展覧会カタログ『内藤礼 生まれておいで生きておいで』（HeHe、2024年）に詳しく、個別の作品解説に関しては、三本松倫代氏の「巡り^{うやま}礼う旅の追憶」を参照されたい。

《color beginning/breath》

京都、ミュンヘン¹から繋がる絵画のシリーズである《color beginning/breath》の本展における展開は、キャンバスに置かれた色彩の中に風景の現れを認め、地や空を描くことを自らに許すという作家の心の動きを経て、展示空間の中にも具体的な色彩が生まれ出るといった新たな次元をもたらした。

展覧会に先立つ2023年11月から2024年5月の間²に日々作家のアトリエにて制作された作品は、二つの会場を繋ぐ時間軸として、東博の本館特別5室（以下、東博特別5室）の左壁（西）に設置された14枚から、フォーラムの空間（8階の壁面から順を追って9階の展示室へと）の44枚へと繋がり、また東博特別5室の右の壁面（東）の14枚へと連続する日付を刻むことで、二つの場所を水平に結び、作家の具体的な生を可視化させる（9-13頁、26-31頁、43-47頁）。うつし取られた呼吸は、規則的な拍で連なり、無意識の流れによって形を成す間際に移ろいつつ、影響しあう日々の営みのさまを露わにしてゆく。

《color beginning/breath》は、二枚で一組でありながらも一枚ずつ描かれ、展示室を巡るごとに色彩のトーンや筆の使い方、キャンバスの大きさなどの変化を見出すことができる。鑑賞者は、絵画の呼吸に耳を澄ませながら、色の現われや波動の応答を見逃さぬようにキャンバスをくまなく辿るだけでなく、どちらの会場においても大きな《座》（17頁、23-24頁、42頁）に腰をかけ、絵画全体を見渡すことで、時間の連なりや切断、次元の漂いなどから立ち上がる光景を味わうこともできる。

内藤の絵画の実践は1993年にまで遡り、紙に赤色鉛筆のみで描かれた極めて淡い色彩の《namenlos/Licht》から始まり、のちに《color beginning》へと移行してゆくが、とりわけ2009年のギャラリー小柳での個展³を転機に、独立した絵画シリーズとしての輪郭を持ち始める。これらは、立体作品と同様に「真新しい白い空間」⁴を扱うもので、

作為を超えるための精緻な配慮や一回性の時間から成立しているが、京都、ミュンヘンで用いられた手法、紙にアクリル絵具から、本展においては、キャンバスにアクリル絵具へと移行している。異なる素材との感触の調律にも、作家の純粹な喜びや驚きを掬いとることができよう。

アトリエにおける生の記録は、さまざまな筆致や水跡を残すアクリル絵具、針のような突先でのタッチや、小さな画布を用いた色の転写などから生成され、水や風から大地や空の様相へ、そして狂気や恍惚の刹那といった生理までを滲ませるかのように見える。8階の廊下から二つの大きさの異なる部屋を巡る道程では、意識の流れは、それでも地上の近い場所に、画布と息を交わすことができるほど、ふっくらとした親密さにとどまりつつある。しかしながら9階のバルコニーまで歩を進めると、眩しい光の中で、粒子のような色が砂塵のように舞う、始まりも終わりも知らぬ世界へと導き出され、解き放たれる。

内藤は、自身の作品をもっぱら「生の内」「生の外」の往還という言葉で物語るが、これら一連のイメージは、内藤の魂が描きながらにして「生の外」へ往きつつ見た「地上の生の光景」であるのだろう。目を持たぬ死者のために地上の光景を描くには、6ヶ月に亘る連日の制作を通じて、自己をなにもものでもないただ一つの魂へと還元してゆく儀式が必要とされたのだ。それゆえ、展示という形で時系列に沿って再訪すると、人類が受け継いでいる何億年も前からの生の記憶のようにも、未来に発掘された現生のうごめきのようにも見える。

立体や平面の造形と並び、言語も作品の一部として重んじる内藤の詩や散文の中には、水や土、道や川、鳥といった具体的な表象が、ためらうことなく現れる。例えば《母型》へ寄せられた下記のような一文は、絵画の向こう側の空間とも響き合う。

ほら、ゆうゆうと侵入。でもほんとうは何億年も前からそこにいたのだというところがすぐそこであって、そこからいまきゅうに押しだされて泣いているのかもしれない。わたしはたったいまのことがよくおもいだせない。その動きが雲ほども遅いのだ。雪よりも風よりも遅いので追い越してしまい、見失う。いろんなものが引きのばされてしかたない。しんしんと、ひろがり、ひろびろとしてきた。じきに、すぐそこの空きに出たとしても不思議におもわない。⁵

絵画《color beginning/breath》が、作家の生の時間であるだけでなく、個人の過去も未来も超えた「生の外」からの眼差しであるとしたら、その「試し描き」として残された痕跡は、日常、つまり「生の内」との回路を繋ぎとめる存在であろう。東博特別5室のガラスケースの上の一葉のはがきのように置かれたそれは《無題》を成す小さきものたちの身振りの傍に、またフォーラムにおいては、実際の展示作品の《試し描き》（14頁、

32頁、56頁)としてアトリエの一角を思わせるように壁に留められ、いとも儂い現在のみ
ずみずしさとして、空間に木漏れ日のような光を授けている。

また、フォーラムの吹き抜けの展示空間には、毛糸と毛糸を糸で結んだガーランドの
ような立体作品《color beginning》(2024、14頁、16-17頁、21-22頁、42頁)が、ゆったりと重
力に身を任せている。緑、茶、青、白、赤、黄、オレンジ、ピンクなどがランダムに緩やか
な弧を作り上げる手つきは、強固なガラス建築の金属グリッドの合間に仮設の祝祭性を
放つ。空間で微かに揺れる糸や毛糸の色は、青空のもと輝きを放ち、逆光で見上げるとふ
わふわとした毛糸の質感が感じられる。また曇りの日には、シルエットが強調されるも
の、空間にふと、色が目を横切るときもある。白く高い壁の前に置かれたガラス瓶《無
題》の中では、毛糸や糸の切れ端が光の断片のように集められている。身体をかがめ、
ガラス瓶に近づいた鑑賞者の掌の中でそれらはひとしきり戯れたのち、感触だけを残し、
瞬く間に身を隠してしまう。

内藤の作品にしばしば見出される同一の題名や繰り返されるモチーフや素材は、この
ように緊張と弛緩の危うい均衡の中で、鑑賞者の無意識に語り掛け、作品の解釈を多重
化し、深化させてゆく。東博の平成館 企画展示室での《color beginning》は、暗闇の中
に浮かび上がる色とりどりのポンポンの宇宙であった。



生の没入

次に、東博の会場には姿を見せることのなかった《顔(よろこびのほうが大きかったです)》
(以下《顔》、3-5頁、7-8頁、38-41頁)⁶、《ひと》(18-19頁、36-37頁、59頁)、ガラス瓶に活け
られた花《無題》(表紙、24-25頁、35頁)といった生そのものを象徴的に取り上げる作品群
に、目を向けてみたい。

フォーラムの展示におけるもう一つの主要な存在は、雑誌のページを丸めて作られた
《顔》を中心に構想された一連の作品で、会場に入ったすぐの8階の回廊と9階の空間に
配されている。ビルのエレベーターを降りると、すぐに一人の顔が目に入る。カラーの
《顔》が展示されるのは初めての試みとなる。

生は生であり それは生きていますように
死は死であり それは生きていますように⁷

作家は、東博の会場において展示ケースや展示室などの記号を用いつつ、「生の内」
「生の外」という二つの世界を、主に並列あるいは対称^{シンメトリー}を用いて語り、その形式はタイト
ルにも、カタログに寄せられた上記の詩篇の中にも現れていた。

三本松は、東博の展示室や二つの会場を繋ぐ道行を「生の内と外」と称したが⁸、
フォーラムの会場もまた「生の内と外」を併せ持つ空間である。ガラスブロックに覆わ
れた外壁からは、自然光のみならず、街の様相や気配が抽象的な色や光として絶え間なく
空間に伝えられる。地上25メートルの細長く奥行きのある吹き抜け二層の構造、
非対称^{アシンメトリー}な二つの展示空間や光の届きにくい廊下、幅の狭いバルコニーなど、光や鑑賞の
ための環境制御が思うように効かない場所であると言える。その中で唯一、上下の層で
対称に配置された《Two Lives》(3頁、48頁)は、生の只中、同じ人の中で「往きながら還っ
ている」⁹魂と解釈される。

内藤は、東博特別5室で、縄文の人びとの手によって作られた土製品や獣骨などを、
ガラスケースの中に納め床上に置いた。それらは「ままごと」と呼ぶ小さな手つきに
よって、ポンポンや石、毛糸などで「飾り付け」された。窓からの自然光は、天井から
吊られたガラスビーズの《母型》が持つ柔らかい彫刻的なフォルムを浮かび上がらせ、
小さな鈴が祝福を告げていた。

フォーラムにおいては、自然と人工の光や色合いの中で、今を生きる私たちの「顔」
を中心としたコンポジションが、絹糸とテグス糸で吊るされ連続している。紙の上には
色彩のある毛糸がそっと蝶々結びの糸で留められ、それぞれの《顔》には、一つずつの
ビーズと花柄のプリント布《恩寵》(4-5頁、7-8頁、38頁、40-41頁)が、壁面に添えられる。
そして床と天井に設置された合わせ鏡の《世界に秘密を送り返す》(18-20頁、40-41頁)
という光の柱によって完成する。

《顔》は、複製された一片の紙であり、軽やかで儂く、僅かな風にも振動する。紙は、
他者によって思いがけず暴力的に歪められ、しかし隠されていた、あるいは与えられた
感情をむき出しにもする。縄文時代に亡き子の足を粘土で型取りした手と、現代に雑誌
で笑う人の顔をぎゅっとした指は、どちらも私たちの記憶の残像の中で感情と結び付く。

人の手の中で丸められ広げられたその紙は、未来の考古遺物といつかなるのだろうか。

紙の襞に刻まれた「よろこび」を、慰め、護り、祝うことで未来へ送り出す。その場所は、カテドラルの回廊に設置された数々の聖人の礼拝室のようにも見え、内藤の作品に親しむ人々は、そこで《恩寵》へ息を吹きかけることをためらわない。人が地上に降り立ったときから、誰にでも与えられるとする7.8センチ四方の面積を持つその布の作品。そっと近づき、唇をすばめる仕草の甘美な魅力や重力から解放された布の一瞬の美しさ、小さなあぶくのようなスフレビーズに映り込む世界、合わせ鏡に反射する光、それらは、生の只中にある人が、ときに「生の外」の力を求めながら「生の内」に踏みとどまる、といった人の普遍的な祈りを空間によみがえらせる。

そして、もう一つの生の象徴である一輪の花《無題》は、広口のガラス瓶に毎日活けられ、たっぷりと満たされた水とともに《座》(24頁、35-36頁)の前に置かれる。花は、気温の微細な変化や人々の行き来に誰よりも敏感で、強さと傷つきやすさを隠すことなく、自分の生の座を鑑賞者のために明け渡すようにひたすらに時を刻む。

薔薇よ、ああ 純粋な矛盾よ、こんなにも沢山の
瞼の下で誰の眠りでもないという
悦びよ。¹⁰

薔薇を愛した詩人、リルケは、墓碑銘にこのように記したという。美しい花びらを瞼¹¹に重ね合わせ、その花びらの奥に眠る誰か、そしてその誰のものでもない眠りを歌う詩であると言われている。しかし、矢内原伊作の解釈を参照してみると、「薔薇は眠りそのものだ。にもかかわらずそれは咲き、薫り、そして歌う。だからこそそれは『純粋な矛盾』なのだ。」という。花は自らの中に花びらという瞼を持ち、眠りという不在そのものでありながらも常に満ちている。この墓碑銘の謎は、水を湛えた《母型》や《枕》といった内藤の作品と同じように、常に誰かの手や呼吸で満たされている。

憧憬の生命力

最後に、本展を貫く内藤作品の時間と記憶について、振り返っておきたい。空間における体験として作品を構想し、一時的な展覧会での発表を主とする内藤は、作家を広く知らしめた豊島美術館という恒久設置の例外を除き、常に「じぶんで作ってじぶんで壊すこと」¹²を繰り返している。その別れの仕事である片付けることは、「作ることも見ることも比べられないひとつの意味ぶかい人の行為なのかもしれない」¹³といつしか思うようになったと記している。「片付けること」に「記録すること」は含まれているのだろうか。

内藤の作品は、30年来、写真家の畠山直哉が撮影しているが、私は、見ることの叶わなかったいくつもの展示にその写真を通じて出会うことになった。写真には、奇跡的な、としか形容できない宿りの瞬間がしばしば収められている。その写真から無自覚にも呼び起こされる記憶とは、体験を伴わなかった展覧会においても、ときに一層強いものにもなった。内藤が言うように、私たちは、「地上への憧憬を隠しきれ」ず、絶えず「繰り返し思い出そうとしている」¹⁴とするのであれば、遅過ぎた故、早過ぎた故、出会うこと

のできない時間は、いつも私たちの傍らに、憧憬として生きようとしているのだろう。憧憬がもたらす生命力が記憶の源だと、内藤の作品は、そして畠山の写真は雄弁に証明してくれる。本展に偶然にも立ち会うことのできた鑑賞者たちが、花の水をこぼさんばかりに顔を寄せるとき、フライヤーの花の写真を大切にみつめるとき、彼らから「生まれてきたよ、生きてゆくよ」という無言のささやきが立ち上がってくるような気がする。

生涯には、行ったあと戻れないときがある。わたしと分けることのできない一つの、こんなにも親しみあった、だいでたまらない、あのひと、みんなといた世界、まだあの人は、みんなはいる世界を、振り返ることもできずひとりてただ前にしか進めないとは。どうかその先に、あたたかな顔があってほしい。¹⁵

東日本大震災で、失われた大勢の人々を前に、内藤は《ひと》を作り始めた。畠山は、失われた故郷や大量の木を前に、津波の痕跡と樹木を記録した。誰もが逃れることのできない日常の流れは、記憶を次々と書きかえてゆくが、上野と銀座を往還した「生まれておいで、生きておいで」という一回きりの経験は、どのように記憶され、未来へと伝えることができるのか。ガラス瓶の水を入れかえ、花を活けながら私は考える。東京ピエンナーレで台東区黒門小学校の防空壕に立った小さな《ひと》¹⁶は、ここにやってきて、生まれたばかりの《ひと》とともにガラスブロックから交差点を歩き交う人を見つめている。見たものを「きぼう」だと疑うことなく信じる《ひと》に、どうやって戦争や自然災害を説明したら良いのだろうか。

10月に入って、東博のラウンジに出かけた。ソファに深く沈み込みながら、ざわめきの中に身を置く。黒いダイヤル式の電話、水飲み場、窓越しに庭の池の水面を見る。季節がすっかり変わった。重ねられ、常に水が満たされていたガラス瓶はどこに行ったのだろうか。モザイクタイルの中に、小さな秘密だけが残されていた。



1. 2021年に京都のMtK Contemporary Artでの個展「breath」（2021年9月18日–11月7日）で初めて発表し、2023年にミュンヘン州立版画素描館「Rei Naito: breath」（2023年6月7日–8月13日）で発表された。

2. 2023年11月11日から2024年5月3日までに描かれたものから、2023年12月1日から2024年5月3日までの作品が展示された。

3. 個展「color beginning」ギャラリー小柳、2009年3月24日–5月16日

4. ミュンヘンの展覧会カタログより引用。以下は、引用箇所を含む日本語全文（作家提供、カタログ未掲載）。Rei Naito, [untitled (*on color beginning*)], *Rei Naito - breath* (Cologne: Verlag der Buchhandlung Walther und Franz König, 2024), p. 61.

最初に定めた。絵を描こうとしない、作品を作ろうとしない、色彩の顕現のみを待つこと。紙に触れる瞬間が来たら、私というよりも人そのものである心と手と指が一つになるようにと願った。色彩が顕われるそのとき、私はそのことに驚き、喜びを持って見つめることができるか。それだけを心にした。

どうしてかわからない。ときに顕われは、生き物に見えてしまう。またあるときは草花に、見知らぬ風景に見えるのだった。真新しい白い空間に、望まなくとも、生命の光景を見出さずにはいられなかった。私もまた生命であり、地上の存在だった。

地と空を見出さずにはいられないと自覚し、「風景を描くこと」を許した。見出す、それが人なのだろう。

そして、ゆっくりと「死者のための枕」に近づいていった。すると、私のうちに死者の眼差しが重なりはじめた。私は眼を持たない死者のために地上の光景を見えるようにしているのだろうか。あるいは、死者たちが地上の光景を思い出しているのだろうか。一つ確かに感じるがあった。私たちは、地上への憧憬を隠しきれないのではないか。故郷を繰り返し思い出そうとしている。

5. 内藤礼『空を見てよかった』新潮社、2020年、66頁（初出『文學界』2007年9月号、文藝春秋社、327頁）。

6. 《顔》は1993年に偶然から生まれた作品で、2015年、資生堂ギャラリー「椿会展—初心—」にて初めてタイトルを付け、発表された。作品の誕生には、下記のような内藤の経験がある。あるとき、壁に留めてあった笑う女性の印刷物を、感情の昂ぶりからくしゃくしゃに丸めて投げ捨てようとした。しかし、それが人の顔であったことに気づき、その紙をもう一度上げて元に戻そうとしたとき、現れた女性の笑顔や喜怒哀楽の表情に、急激な意味の転換を感じ取ったという。それ以後、「笑う顔」のイメージを蒐集し続けている。

7. 『内藤礼 生まれておいで生きておいで』展覧会カタログ、HeHe、2024年、103頁。

8. 三本松倫代「巡り礼う旅の追憶」同書、112頁。

9. 二つの会場に広がる展示についての作家の構想については、下記のインタビューに詳しい。「往きながら還っている内藤 礼のいま」（聞き手:加藤木礼）『芸術新潮』2024年11月号（第75巻第12号）、新潮社、98–101頁。

10. 矢内原伊作『リルケの墓』創文社オンデマンド叢書、講談社、32–34頁（初版：創文社、1976年、23–25頁）。以下に、同書の矢内原の解釈を引用する。

「誰の眠りでもないという悦び」、ぼくはこれを、薔薇がうっとりともどろんでいるように、死という無名の世界にはいってもはや誰の眠りでもない眠りを眠る悦び、という風に漠然と解していたが、これは間違っている。そうではない。むしろ反対に、この碑銘は、誰の眠りを眠るのでもないという悦び、つまり、誰の眠りでもなくあるということ、眼に見えないものになりながら常にめざめ、オルフェウスのように変身しつつ歌い続けることの悦びを告げているのではないだろうか。リルケはフランス語の詩集『薔薇』の中で、薔薇の花びらを「千の臉」と言い、「千の眠り」とも呼んでいる。薔薇は眠りそのものだ。にもかかわらずそれは咲き、薫り、そして歌う。だからこそそれは「純粋な矛盾」なのだ。

11. 《まぶた》は内藤の作品名でもあり、作家によれば2015年ごろから構想が始まったもので、本展で二つの形で作品化した。東博特別5室では、《まぶた》は、細い銀紙が水平線のように大理石の壁面に設置され、大地や水、空の中に眠る超人的な存在が結界を生み出すとともに結び付ける光景となった。また、東博およびフォーラムの各会場では、1センチ角の銀紙の《まぶた》が《座》に寄り添うように揺らぎ、空間に光の瞬きをもたらしていた。

12. 内藤、[書き下ろし]（2018年8月–2019年8月）、前掲書、158頁。

13. 同上

14. Rei Naito, op. cit., p. 61. 作家提供の日本語原文に基づく。

15. 内藤、[書き下ろし]（2018年8月–2019年8月）、前掲書、164頁。

16. 本展で展示された4体の《ひと》のうち1体は、「東京ビエンナーレ2020/2021」（2021年）の展示の中で、台東区立黒門小学校防空壕に立った経験を持つ。この作品は、「私は生きた」と題され、東京大空襲の犠牲者への慰霊を込めて制作された。

Whose Sleep Under Eyelids?

Reiko Setsuda (Curator)

The passage of time, intricately linked with Rei Naito's work, is manifested subtly within the reality of the exhibition, lingering briefly before fading, yet imparting a faint, persistent illumination and spatial awareness within us.

Conceived in a circular flow between two venues, the Tokyo National Museum (hereafter, “the Museum”) in Ueno and Ginza Maison Hermès Le Forum (hereafter, “Le Forum”) in Ginza, *Rei Naito: come and live - go and live* shows us “scenery of life on earth” before, perhaps, it draws its last breath and retreats back into itself. Through reflection on the exhibition at Le Forum, described by the artist as “immersion in life,” this essay endeavors to document forms revealed within a structure in which the two exhibitions overlapped for seventeen days. For further details on the exhibition at the Museum, please see the exhibition catalogue *Rei Naito: come and live - go and live* (HeHe, 2024), and for analysis of individual works, refer to “Reminiscences of a Pilgrimage” by Tomoyo Sanbonmatsu in the same catalogue.

color beginning/breath

The series of paintings titled *color beginning/breath*, which continues from earlier exhibitions in Kyoto and Munich,¹ here takes on new dimensions through the artist’s emotional process of acknowledging the emergence of landscapes within colors on the canvas and allowing herself to depict the earth and sky, bringing specific colors to life within the exhibition space.

The works, created in the artist's studio between November 2023 to May 2024,² prior to this exhibition, serve as a chronological bridge between the two venues. Starting with 14 works on the left wall (west) of Room T5, the Japanese Gallery (Honkan) at the Museum, the series extends to 44 works at Le Forum (from the 8th floor wall to the 9th floor gallery), and culminates with 14 more on the right-hand wall (east) of Room T5, the dates of the works conveying the passage of time. This arrangement visually connects the two locations and renders the artist visible as a tangible presence (pp. 9–13, 26–31, 43–47). Captured breath follows patterns of regular pulsation, and as shapes evolve through the flow of the unconscious, they reveal the nature of mutually influential daily activities.

The works in *color beginning/breath* comprise two canvases painted separately but regarded as pairs. Visitors moving through the galleries can observe changes in coloration, brushwork, and canvas size. Not only can viewers trace the canvases to capture every emergence of color or vibrational response, but they can also sit on a large seat (pp. 17, 23–24, 42) at each venue, surveying all of the paintings and savoring scenes that arise from the flow and severance of time and the drift of dimensions.

Naito's pictorial practice dates back to 1993, and evolved from the extremely pale-hued *namenlos/Licht*, drawn solely with red pencil on paper, to *color beginning*. Notably, a 2009 solo exhibition at Gallery Koyanagi³ marked a turning point, and the work began to take on the outlines of an independent painting series. Like her three-dimensional pieces, these works engage with a "pristine white space"⁴ established through elaborate calibrations aimed at transcending mere intention, and through the singularity of time. In Kyoto and Munich she worked in acrylic on paper, but has shifted to acrylic on canvas for this exhibition. The artist's pure joy and surprise at adjusting to the tactile qualities of different materials is evident.

Records of life captured in the studio through acrylic paint in a wide range of brushstrokes and drip marks, touches with needle-like tips, and color transfers using small canvases, seemingly allow the elements of water and wind to merge with those of earth and sky, and even with physiological moments of madness and ecstasy. The path from the 8th-floor corridor through rooms of varying sizes maintains a soft intimacy that feels close to the ground, to the extent that consciousness can meld with the canvas. However, ascending to the 9th-floor balcony, one enters a world of dazzling light where particles of color dance like dust, a world without beginning or end, and is ultimately liberated.

Naito often describes her works in terms of circulation between "inside of life" and "outside of life," and this series of images seems to represent "scenery of life on earth" that Naito envisioned as she moved toward the "outside of life." Painting these earthly scenes for the sightless dead required a ritual capable of distilling the self into nothing but a single soul through six months of daily production. For this reason, when revisited chronologically in an exhibition format, they resemble memories of life passed down from millions of years ago, or as the stirrings of present-day life unearthed in the future.

In addition to her two- and three-dimensional visual art, Naito's poetry and prose, which give language equal weight as part of the work, unhesitatingly present specific images of water, earth, paths, rivers, and birds. For example, the following text accompanying her installation *matrix* resonates with the space beyond the paintings:

See, it infiltrates effortlessly. But in fact, it may have been there for hundreds of millions of years, and is now weeping as it is suddenly pushed out. I cannot quite recall what happened just now. The movement is as slow as clouds, slower than snow, slower than wind. I overtake it and lose sight of it. All manner of things are stretched beyond their limits. It has spread quietly into a vast expanse. I will not be surprised if it appears in the void just ahead.⁵

If the painting series *color beginning/breath* represents not only the artist's lifetime but also a gaze from the "outside of life" that transcends individual past and future, then the vestige left as a "trial sketch" serves as a connection to the everyday, or the "inside of life." Placed atop a glass case in Room T5 like a single postcard, it is among the small gestures that comprise *untitled*. At Le Forum, an exhibited work attached to the wall as *color test* (pp. 14, 32, 56) suggests a corner of the studio, imbuing the space with the ephemeral freshness of sunlight filtering through leaves.

Meanwhile, in the atrium exhibition space of Le Forum, *color beginning* (2024, pp. 14, 16–17, 21–22, 42), a three-dimensional work like a garland of bundled yarn tied with thread, hangs loosely, surrendering to gravity. The shades of green, brown, blue, white, red, yellow, orange, and pink randomly describing a gradual arc amid the metallic grid of the solid glass building emanate a sense of temporary festivity. The colors of the thread and yarn sway slightly, shimmering under the blue sky, and when one looks up against the light, the fluffy texture of the yarn seems palpable. On cloudy days, although the silhouettes are emphasized, the colors in the space occasionally flit across one's vision. Inside the glass jar *untitled* placed in front of a tall white wall, ends of yarn and thread are gathered like fragments of light. As viewers bend down and bring their palms close to the glass jar, the threads play briefly before vanishing in an instant, leaving behind only a tactile sensation.

In such ways, titles, motifs, and materials often recurring in Naito's oeuvre speak to the viewer's subconscious within a precarious equilibrium of contractions and release, multiplying and deepening interpretations of the works. The piece titled *color beginning* in the Museum's Thematic Exhibition Room (Heiseikan) was a cosmos of colorful pom-poms floating in darkness.

Immersion in Life

Next, let us turn to a group of works that deal symbolically with life itself, which were not displayed at the Museum: *Face (the joys were greater)* (hereafter referred to as *Face*, pp. 3–5, 7–8, 38–41),⁶ *human* (pp. 18–19, 36–37, 59), and *untitled* (cover, pp. 24–25, 35), this last consisting of flowers arranged in a glass jar.

Another significant presence in the Le Forum exhibition revolves around a series of works with *Face* as their conceptual linchpin, made from rolled-up magazine pages and extending from the 8th-floor corridor right at the entrance to the 9th-floor space. As you exit the building's elevator, a face immediately captures your attention. This is Naito's first presentation of a colored *Face*.

*May life be life,
and its presence permeate the realm of the living
May death be death,
and its presence permeate the realm of the living⁷*

The artist deploys signifiers such as display cases and galleries at the Museum venue to articulate the dual worlds of "inside of life" and "outside of life," primarily through parallels or symmetries. This morphology is echoed in both the works' titles and the poem above, which is included in the catalogue.

Sanbonmatsu describes the paths that connect the galleries and the two venues at the Museum as "inside and outside of life,"⁸ and the Le Forum venue also straddles both these worlds. The glass block-covered exterior walls allow not only natural light but also the city's ambiance and presence to continuously infuse the space with abstract patterns of colors and light. The 25-meter-high, elongated, two-leveled atrium, with its asymmetrical two-part

structure, dimly lit corridors, and narrow balconies, defies efforts at environmental control in terms of lighting and viewing. In this environment, *Two Lives* (pp. 3, 48), the only work symmetrically positioned on the upper and lower floors, is seen as a soul “returning while departing”⁹ within the same life, the same individual.

Naito placed artifacts from Japan's prehistoric Jomon people, such as earthenware and animal bones, in a glass case on the floor of Room T5 at the Museum. These were adorned with pom-poms, stones, and wool yarn in a set of oblique gestures that the artist describes as “*mamagoto* (play house, child's play).” Natural light from the windows illuminated the soft sculptural forms of glass beads hanging from the ceiling in *matrix*, while small bells signaled blessings.

At Le Forum, compositions centered around the faces of viewers living in the present are continuously suspended with silk and monofilament threads amid a melange of natural and artificial light and color. On paper, colored wool yarn is delicately tied with ribbons of thread, and each *Face* forms a set with a single *Grace*, made with floral-print fabric, and a tiny glass bead mounted on the wall. The installation is completed by *Return the secret to the world*, a column of light created by mirrors placed on the floor and ceiling.

Each *Face* consists of a single piece of paper, light and ephemeral, vibrating in even the slightest breeze. One paper can be unexpectedly and violently distorted by others, yet it also reveals emotions that were concealed or imposed on it. The hand that molded a piece of clay to carry the imprint of a deceased child's foot in the Jomon period, and the fingers that tighten around a laughing face in a magazine today, both connect with emotions lingering in the afterimages of our memories. The paper, crumpled and unfurled by human hands, might become an archaeological relic in the future.

The joy inscribed in the folds of the paper is projected into the future through solace, protection, and celebration. The space evokes the chapels dedicated to numerous saints lining the corridors of a cathedral, and those familiar with Naito's art do not hesitate to breathe life into the *Grace* found there. This work consists of squares of fabric measuring 7.8 centimeters on a side, one of which has been given to each human being since we first descended to the earth. People approach gently, captivated by the sweet allure of pursed lips, the fleeting beauty of fabric freed from gravity, the world reflected in tiny soufflé beads, and the light dancing in mirrors facing one another. These elements revive the universal prayers of people who, while in the midst of life, at times seek power from “outside of life” while remaining steadfastly “inside of life.”

In another *untitled* work, another symbol of life, a single flower, is replaced with a fresh one each day in a wide-mouthed glass jar, given plenty of water and positioned in front of the seat (pp. 24, 35–36). The flower, most sensitive of all to the slightest changes in temperature and the bustle of passersby, constantly marks the passage of time, openly revealing both its strength and its vulnerability, and offering its seat in life for viewers' contemplation.

*Rose, oh pure contradiction,
joy of being no one's sleep
under so many eyelids.*¹⁰

The poet Rainer Maria Rilke, who loved roses, composed this as his own epitaph. It has been described as a poem that lays beautiful petals over eyelids,¹¹ invoking someone who sleeps behind those petals, in a sleep that belongs to no one. However, according to Isaku Yanaihara's interpretation, “The rose is sleep itself. At the same time, it blooms, emanates fragrance, and sings. That is why it is ‘pure contradiction.’” The flower has its own eyelids in the form of petals, representing absence itself in the form of sleep while remaining ever full. The mystery of this epitaph is perpetually revived by someone's touch or breath, as in Naito's works such as *matrix* or *pillow for the dead*.

The Vital Force of Yearning

Finally, I would like to reflect on the themes of time and memory that pervade Naito's works in this exhibition. Naito, who primarily conceives her works as spatial experiences for temporary presentation, consistently embraces the process of “creating by myself and destroying by myself.”¹² A notable exception is her permanently installation at the Teshima Art Museum, which has significantly heightened her name recognition. She has come to view cleaning up after these temporary works, a form of parting, as “a deeply meaningful human act that cannot be compared to either creating or viewing.”¹³ Does the act of cleaning up include the act of documentation?

The photographer Naoya Hatakeyama has been shooting Naito's works for over 30 years, granting me access to many exhibitions I could not visit in person. These photographs often capture transcendent moments that can only be described as miraculous. The memories unconsciously evoked by these photographs can sometimes be even more intense when connected with exhibitions I did not directly experience. If, as Naito suggests, “we cannot completely conceal our yearning for the earth and are constantly trying to recall it,”¹⁴ then the times we could not meet, whether too late or too soon, are always endeavoring to live by our side in the form of yearning. The vital force brought about by yearning is a wellspring of memory, as eloquently expressed by Naito's art and Hatakeyama's photographs. When visitors who happen to attend this exhibition lean in so close they threaten to spill the flower's water, or when they gaze intently at a photo of a flower on a flyer, it feels as if a silent whisper emerges from them, proclaiming, “I was born, I will go on living.”

*In the course of our lives, there are times when we cannot return. I cannot share this never-to-be-repeated world, so familiar and unbearably precious, with this person or that, with everyone who was in it. I cannot return to the world where they still exist, I can only move forward alone, unable to look back. I hope there are warm faces waiting ahead.*¹⁵

After the Great East Japan Earthquake, contemplating the loss of so many lives, Naito began producing the series *human*. Hatakeyama, confronted with the loss of his hometown and vast stretches of woodland, documented the aftermath of the tsunami and the trees. The relentless flow of everyday life, from which no one can escape, continuously rewrites our memories. How can a once-in-a-lifetime experience like *come and live go and live*, traversing Ueno and Ginza, be remembered and conveyed to the future? I think about this while changing the water in the

glass jar and placing a flower in it. A small *human*¹⁶ that stood in the air-raid shelter of Taito-ku Kuromon Elementary School during the Tokyo Biennale has arrived here, and alongside a newly born *human*, watches through the glass blocks as people cross at the intersection. How can we explain war and natural disasters to a *human* who believes unwaveringly that what they see is “hope”?

In October, I visited the lounge at the Museum. Sinking deeply into the sofa, I immersed myself in the surrounding murmur. I looked at a black rotary telephone, a water server, and the view of the pond’s surface through the window. The season had thoroughly changed. Where had the glass vase that was always filled with water gone? All that remains is a small secret hidden within the mosaic tiles.

1. First shown in the solo exhibition *breath* at MtK Contemporary Art in Kyoto (September 18–November 7, 2021), and later presented at the Staatliche Graphische Sammlung München exhibition *Rei Naito: breath* (June 7–August 13, 2023).
2. Among the works created from November 11, 2023, to May 3, 2024, those chosen for exhibition were created from December 1, 2023, to May 3, 2024.
3. The solo exhibition color beginning was held at Gallery Koyanagi from March 24–May 16, 2009.
4. Quoted from the Munich exhibition catalogue: Rei Naito, [untitled (on color beginning)], *Rei Naito – breath* (Cologne: Verlag der Buchhandlung Walther und Franz König, 2024), p. 61.
I decided at the outset: I would not try to paint a picture, or to create a work, but wait only for the colours to manifest themselves. I prayed that, when the moment came to touch the paper, my mind, hands, and fingers would act as one—not so much as me, but as that which makes a human. When colours emerged, would I be able to gaze upon them with amazement and joy? I had only this in my mind. I do not know why, but at times, the manifestations look like living creatures to me. Or, at other times, like flowers, plants or unfamiliar vistas. Faced with that pristine white space, I found I could not avoid discerning scenes of life within it. I, too, was life, a being of the earth.
Realising my own inability to avoid seeing land and sky, I permitted myself to depict landscapes. This discerning must be part of human nature.
5. Rei Naito, *It was good to look at the sky*, Shinchosha, 2020, p. 66 (originally published in *Bungakukai*, September 2007, Bungeishunju, p. 327).
6. *Face* originated by chance in 1993 and was first titled and exhibited in *Tsubaki-kai 2015—Shoshin* at the Shiseido Gallery in 2015. The genesis of the work is linked to an experience of Naito’s in which, feeling emotional, she impulsively crumpled and was about to discard a printed image of a smiling woman that was affixed to a wall. Realizing it depicted a human face, she attempted to smooth out the paper again and was struck by a profound shift in meaning as she observed the woman’s smiling and expressive face. Since then, she has continued to collect images of “smiling faces.”
7. *Rei Naito: come and live – go and live* exh. cat., HeHe, 2024, p. 103.
8. Tomoyo Sanbonmatsu, “Reminiscences of a Pilgrimage,” *ibid.*, p. 112.
9. For an in-depth discussion of the artist’s conception of the exhibition spread across two venues, see the interview “Returning While Departing: Rei Naito” (interviewer: Rei Katogi), *Geijutsu Shincho*, November 2024 (vol. 75, no. 12), Shinchosha, pp. 98–101.
10. Isaku Yanaihara, *Rilke’s Tomb*, Sobunsha On-Demand Series, Kodansha, pp. 32–34 (first edition: Sobunsha, 1976, pp. 23–25). Yanaihara’s interpretation is as follows:
*The “joy of being no one’s sleep”—I had vaguely understood this as the joy of sleeping in the anonymous world of death, as if the rose were in a trance, but that was a mistake. On the contrary, the epitaph speaks of the joy of not sleeping anyone’s sleep, that is, of being no one’s sleep, constantly awake and continuously singing while transforming like Orpheus, despite becoming invisible. Rilke, in his French poetry collection *Les Roses* refers to rose petals as “a thousand eyelids” and calls them “a thousand sleeps.” The rose is sleep itself. At the same time, it blooms, emanates fragrance, and sings. That is why it is “pure contradiction.”*
11. *eyelids* is also the title of a work by Naito, conceived around 2015 and produced in two forms for this exhibition. In the Japanese Gallery (Honkan), Room T5 of the Museum, *eyelids* appeared as thin silver paper installed horizontally on the marble walls, generating a scene that connected and conjured boundaries for superhuman beings asleep in the earth, water, and sky. At both the Museum and Le Forum venues, 1 cm square pieces of silver paper, *eyelids*, fluttered close to seat, introducing flickers of light into the space.
12. Naito, [newly written] (August 2018–August 2019), *It was good to look at the sky*, op. cit., p. 158.
13. *Ibid.*
14. *Rei Naito – breath*, op. cit., p. 61. Based on the original Japanese text provided by the artist.
15. Naito, [newly written] (August 2018–August 2019), *It was good to look at the sky*, op. cit., p. 164.
16. Of the four *human* figures shown at this exhibition, one stood in the air-raid shelter at Taito-ku Kuromon Elementary School during the Tokyo Biennale 2020/2021 (2021). This work, titled *I have lived*, was created as a memorial to victims of the Tokyo air raids during World War II.

1

れいは目を覚ましました。眠っていたようです。ここがどこかわからず、あたりは暗くて、よく見えません。でも、れいは落ち着いた気持ちでした。おだやかな気持ちでたずんでみると、徐々に目が慣れてきて、見えなかったものが見えるようになってきます。細長い部屋の様でした。れいは部屋の真ん中にいるのがわかって、まわりを眺めてみました。薄暗い部屋のあちこちに小さいしゃぼん玉のような透明の丸玉が浮かんでいるのは、気のせいではないようです。

チリン……チリンチリン。鈴のようでした。それはこの部屋の両端から響いてきて、真ん中のれいに近づくとつれて区別がつかなくなり、やがて一つになりました。

「とんちゃん！」

れいの大好きなとんがそこにいました。会いたくて、会いたくて、でももう会えなかった、とん。何かの間違いではないかと何度も目をこらして見ましたが、確かにそれはとんでした。

「やっとれいさんに会えたよ。うんうん」

あんなに会いたかったとんに会えて涙が出てきてもおかしくないのに、この部屋ではとんがいるのが当たり前を感じられて、れいは当たり前のうれしさだけになりました。ふわふわのとんをれいが抱きしめると、とんはくすぐったいような顔をして、やっぱり当たり前のうれしさだけになったようです。うれしい二つの生は、置いてあったベンチに座ることにしました。

とんと並んで座っていると、正面に白くてまるい風船みたいなものが二つ浮かんでいて、近づいたり離れたり、離れたり近づいたりしていることに、れいは気づきました。この気まぐれな動きは何のリズムなんだろうと考えていると、その部屋には何人も人がいて、静かに、ゆっくり歩いています。

「とんちゃん、ずっと会いたかったよ」

「れいさん、会えると思ったら会えるんだよ。ぼくがどこから来たか、一緒に見てみない？」

そう言うと、とんはひょいっとベンチから降り、右のほうに歩いていきました。部屋の右端のあたりには、さっきと同じしゃぼん玉が浮かんでいて、そばにはころっとした**土版**があります。じっと見ていると、土版はこちらに話しかけてきているようです。でも、何と言っているのか、れいにはわからず、その場から離れられずにいると、とんはそんなことおかまいなしと言わんばかりに、何の迷いもない足どりで、とことこ左のほうに歩いていきます。

仕方なくついていったれいは、右手に**大理石**が置かれていて、やっぱり何を言っているのかはわからないけれど、その大理石がさっきの土版と話していることだけはわかりました。そういえば土版の前には一本の**木**が立っていたので、それがアンテナになって

土版の時間と大理石の時間が通信しているのかもしれませんが。

立ち止まらずに歩いていくとんに導かれていくと、今度はきらきら光る板が立っていました。のぞき込んでいるうちに、こちらとあちらの区別がつかなくなりそうです。土版があったのは、こちらなのか、あちらなのか。大理石があったのは、こちらなのか、あちらなのか。光る板が立っているお花畑は、こちらもあちらも同じように祝福しているように思えてきます。

「母型、かもしれないねえ」

とんはぼろりと言いました。

「母型？」

「この世界のあらゆるものごとの源にあるもの。ものごとの型になっているけれど、それそのものには何の形もなくて、見ることもさわることもできない。だから、もの、って呼ぶのもほんとうは間違いかもしれないねえ。うんうん」

しゃべるだけしゃべって自分で納得して終わらせてしまうのは、とんの癖でした。そのことを懐かしく思い出したれいは、正確には理解できないけれど、とんの言っていることがわかる気もしました。

「母型があるこの部屋は、いったい何？ とんちゃんに会えるなんて、ここはどこなの？」

疑問が次々浮かんできて、れいは尋ねましたが、とんはそれには答えず、一言だけ口にした。

「1999」

何の数字でしょう？ 疑問だらけのれいを見てウインクすると、とんは部屋の右端から真ん中まで来たところで急に駆け出し、今度は左端に向かいます。そこにはまたしゃぼん玉が浮かんでいて、そばには小さな枕が置かれていました。

「**死者のための枕**、だね。てことは、さっきの土版も大理石も生者のものだったんだ。うんうん」

とんはまた一人で納得すると、また部屋の真ん中を目指してとことこ歩いていきます。ついていくしかないれいの目には、同じ木が、同じきらきらの板が、同じお花畑が映っていました。そうしてまた部屋の真ん中に戻ってくると、白くてまるい風船みたいなものが二つ、今も近づいたり離れたり、離れたり近づいたりしています。その様子を見ていたれいは、これは**二つの生**で、れいととんだ、と思いました。その瞬間、れいととんは、見ているのに見られていて、見られているのに見ていることに気づきました。

「**通路**がある！」

とんが叫ぶように言いました。

「**世界に秘密を送り返す通路**だよ。れいさん、一緒に通ってみよう！」

そう言って、ひらりと飛び込んだとんにひっぱられるように、れいも通路に入ってい

きます。そのとき初めて、それまでこの部屋で目にしたものはみんなモノトーンだったことに気づきました。なぜなら、そのとき初めて、部屋中にたくさんの色が見えたからです。

「**始まりの色**。いや、**色の始まり**、かな」
そんなとんの声が聞こえた気がしました。

2

どこをどう通ったのかわかりませんが、**通路**の先には大きな部屋が広がっていました。

「1937だね」

とんがまた数字を口にします。無意識のうちにさっきの「1999」から引き算したれいの中に「62」という数字が浮かび、そのとたん、今度は「400」やら「1000」やら「2000」といった数字が流れ込んできました。何だろうと思うと、それらの数字はこの大きな部屋のあちこちから呼びかけてきています。どうやら、とんは呼びかけてくるものたちを訪ねてまわるつもりようです。れいもゆっくりついていきます。

最初に訪ねた先には**猿**がいて、手紙が届いていました。その手紙は西のほうから送られてきて、「1000」と伝えています。その脇には**木**と**大理石**が横たわり、細長い部屋と響き合っているようでした。

「さっきは1999で、今度は1000。つまり、2999かあ。いや、2937かも……」

数字をこねまわすように、とんがひとりごちています。それを聞いていて眠くなったのか、猿は居眠りを始めました。足がずんぐりして四つ足なので、ひと目みると豚みたいです。今度はとんがそれを眺めていて眠くなってきたようでした。その場でまるくなりかけましたが、いけないいけない、と気づいたように、ぶるぶると震えて立ち上がり、部屋を斜めに横切るように次の訪問先に向かっていきます。

とんと一緒にとことこ歩いていくと、そこにいたのは**猪**でした。猿と同じようにひと目みると豚のようでしたが、れいが知っている言葉では「猪」であることが、すぐにわかりました。なぜすぐにわかるのかはわからないけれど、すぐにわかったのです。そばでは、とんが猪と向き合っていて、なにやら話しているようでした。ここにも手紙が届いていましたが、こちらは北のほうから送られてきて「2000」と伝えています。大理石と並んで木が横になっていて、猿の脇に立っていた木と通信しているようです。

「やっぱり、さっきの**土版**の仲間みたい」

話が終わったらしく、とんはれいに言いました。どちらも豚に似ている猿と猪が仲間なのはわかるけれど、土も仲間？ れいは納得できないまま、先を行くとんを追って、さっきとは逆向きの斜めの線を描きながら歩いていきます。すると、そこには白っぽいかたまりがありました。やはり、そばには大理石、そして凩として立つ木。

「これ、さっきの猪だよね」

そう言われてれいが見てみると、確かにそれは**猪骨**でした。東から届いた手紙は「400」と伝えています。また逆向きに歩き出したとんについていくと、その先には同じような白っぽいかたまりがあって、同じように東から届いた手紙は「400」と伝えています。

「これは鹿、かな？」

不思議そうな顔をしているとんに、今度はれいが言いました。猪と鹿は違う。でも、猪骨と**鹿骨**は同じ骨。じゃあ、骨と石は？ 同じ白いかたまりだけど、違うもの。れいは頭がぐるぐるしてきました。

「同じだけど違うし、違うけど同じ。そういうことじゃない？」

とんは、あっさりそう言うと、次に向かいます。今度もまた逆向きの斜めの線を描くように歩いていくと、行っては戻り、戻っては行く二人の描く線は、近づいたり離れたり、離れたり近づいたりする白くてまるい風船みたいなものに重なっていくようでした。そうしてたどりついたところには、土でできたまんまるの**丸玉**が見えます。真ん中を貫くように穴があげられていて、紐を通せば首飾りになりそうです。それを身につけたところを想像してみて、このまんまるの丸玉が猿とも、そして鹿とも、同じだけど違うし、違うけど同じであることが、れいにはわかった気がしました。

うんうん、と一人うなずいたとんは、また逆向きに斜めの線を描き始めると、部屋の真ん中あたりで止まりました。ところが、そこで何かを目にすると、とんはうずくまって動かなくなってしまいました。今までは様子の違うとんを見て、れいは駆け寄りませう。

「とんちゃん、だいじょうぶ？」

「うん。この子、幼いうちに死んじゃったんだね。両親なのか、兄弟なのか、それとも友だちなのかはわからないけど、きつといつまでも忘れないように、こんな**足形**をつくって、いつでも一緒にいられるようにしたんだ。さっきの丸玉みたいに首飾りにしたのかもしれないね」

そこにある平べったいかたまりには、確かに小さな足形が見えました。とんが言うように、きつと幼いうちに死んでしまった子どもの足を押しつけてつくったのでしょうか。この子が死んでしまったとき、まわりの人たちはどんなに悲しかったことか。想像してみただけで、れいはその子が友だちだったみたいに悲しくなってきました。

「でもさ、れいさん、気づかない？ この足形もさっきの土版の仲間だし、猿も、猪も、丸玉も、みーんな仲間だよ。ほら、ここにも」

見ると、ここにも北から手紙が届いていて「2000」と伝えています。手紙の上には、毛糸みたいにふわふわした白い丸玉。手紙の脇には**ガラス瓶**と、つるつるした大きめの白い丸玉。瓶の中には、あの小さいしゃぼん玉よりもっと小ぶりの、小さい小さいしゃぼん玉が無数に見えます。

「土、猿、猪、骨、骨、丸、足、丸、丸……」

とんはぶつぶつ呪文のように言っています。どこから始まったのか、どこまで続くのか、どこかで終わるのか、なにもわからないつらなり。しゃぼん玉は、そのつらなりを結んでいるのかもしれない——そんな思いがれいに訪れます。そのとき、この大きな部屋のあちこちに**まぶた**があって、れいととんを、そして猿や猪や骨や丸玉や、そのつらなりのすべてを、ずっと見ていることにれいは気づきました。

「とんちゃん、そこに座ってみようよ」

部屋の中央を縦方向に貫く線上に足形を眺められるところに木の**座**があることに気づいたれいは、とんに呼びかけると、とんと並んで座りました。さっきの部屋のベンチより幅が狭いので、**二つの生**はくっつきそうです。地べたに座っているようなものなので、少し頭を動かすと部屋全体を見渡せました。見ているのに見られていて、見られているのに見ている。部屋にあるいくつものまぶたと、れいととんのまぶたは、始まりも終わ

りもないつらなりの全体を眺めているようでした。

足形のほうを向いて座る二人の前には、右斜め前くらいに一本、足形に近い左のあたりにもう一本、杖が立っています。二本の高い杖は大きなアンテナで、だとすると、この部屋は通信の基地みたいなものかも。だから、あのつらなりの全体を眺められるのかもしれない。そんなことをつらつら考えながら、れいはとんと並んで座っている時間が生まれては消え、消えては生まれているように感じられて、いつまでも、いつまでもこうしていられたらいいのに、と思いました。

どのくらい時計の針が動いたのでしょうか。自然の光がやさしく照らしていた大きな部屋は、うっすら暗くなっています。とんはけだるそうに身を起こすと、後ろに歩いていき、二人が座っていたのよりずっと大きな木の座の上にひょいっと乗ると、ふうっと何度か息をしました。そのたびに、お花畑がひらひら舞う光景が見えて、それが恩寵であることが、れいにはわかりました。

見ると、とんは座から降りて、猪がいたほうへおそるおそる近づいています。れいもあとを追うと、そこには白くてまんまるの毛玉が一つ、置かれていました。ふわふわで、息をすると飛んでいってしまいそうです。

「土、丸、白……同じだけど違うし、違うけど同じ。ふうむ」

またとんがぶつぶつ言っています。しばらく考えていたようでしたが、何かを理解したように、とんは近くの長い壁に近づき、鹿骨のあるほうに向かって壁沿いに、ゆっくり歩いていきました。れいにはついていくことしかできません。一歩ずつ、一歩ずつ歩いて部屋の奥までたどりつくと、とんは奥の壁にウインクし、れいのほうを振り返って、こう言いました。

「れいさん、始まりの色は色の始まりになるみたいだ。続きを見に行こう」

ふと見上げると、小さい小さいしゃぼん玉が浮かんでいるような気がして、れいはこれもまた母型であるような気がしました。

3

とんの息吹に乗って運ばれたのかもしれない。れいととんはまた違う場所に立っていました。これまでの二つの部屋とはだいぶ違って、ひんやりした空気が広がっています。

田舎と都会。自然と人工。生物と無機物……れいの中にいくつもの対が浮かんできました。

「ほらほら、またそうやってすぐに対立させちゃうんだから！」

れいの考えることなら何でもわかる、とでも言いたげに、とんがたしなめてきます。

「だったら、始まりの色と色の始まりも対立してるの？ それから、ほら、この二つもそうだって、れいさんは思うの？」

見上げると、ここにも白くてまるい風船みたいなものが二つ浮かんでいて、近づいたり離れたたり、離れたたり近づいたりしています。どうやら、ここも通路のようです。何人も行ったり来たり、来たり行ったりしていました。ふと壁を見ると、笑っている女の人の顔、顔、顔。どれもくしゃくしゃとしていて、見る角度を変えると、ちょっと悲しそうな顔に見えたりするけれど、でも笑っている。その一人一人のかなしみの総量とよ

こびの総量はどちらが多かったのだろう——れいは、つらつらそんなことを考えました。

「かなしみとよるこびも近づいたり離れたたり、離れたたり近づいたり。でも、よるこびのほうが大きかったです、って言ってるのが、れいさんにも聞こえるでしょ？」

とんはそう言うと、またふうっと息をすると、お花畑が舞う恩寵が広がりました。そこには小さいまぶたがあって、さっきの部屋とこの場所のあいだで、見ているのに見られていて、見られているのに見ている、そのつらなりが感じられ、それが世界に秘密を送り返すことなんだ、とれいには理解できました。

「うんうん、れいさんにもようやくわかってきたようだねえ」

上から目線で言われたようで、むっとしたれいは、とんの頭をぼこんと軽く叩こうとしました。でも、そんなことはお見通し、とでもいうように、とんはびよんと跳ねたかと思うと、れいの手を軽くひっかきます。

「いたっ！ まったく、とんちゃんにはかなわないなあ」

手にうっすらついた傷の痛さは、れいにとってはよるこびでした。

「かなしみとよるこび。同じだけど違うし、違うけど同じ。うんうん」

とんは繰り返します。それは目の前で近づいたり離れたたり、離れたたり近づいたりする二つの生に重なり合っている。そのことを確かめるために、れいととんという二つの生は始まりの色のつらなりに向かっていきました。

4

人工だけど自然で、自然だけど人工。区別できるけれど、区別できないもの。それが始まりの色と色の始まりに少しずつ、少しずつ重なり合っていく過程を、二つの生は目のあたりにしています。あたりを見ると、壁はすべてガラスでできていました。れいがとんのほうを見ると、とんは壁になったガラスと同じように透き通っているように感じられます。透明だけど向こうは見えず、でも光はこちら側に届いている——そんな不思議な空気の中に、そのうちとんが溶け消えてしまうのではないか。そう思って、れいは怖くなりました。

チリン……チリンチリン。また鈴です。きっと、とんが歩いてるんだと思って、れいは始まりの色が色の始まりになるのを追うように、とんの姿を探します。鈴に近づいていくと、そこは吹き抜けになっていて、さっきまでとは違って高い天井を見上げられる部屋であることがわかりました。もう夕暮れ時も過ぎて、ガラスの向こう側には明滅する赤や白の光が見えます。ネオンサインなのでしょう。都会のようでした。たえず変化する色とりどりの光。でも、そこから想像される車の行き交う音も人々が語り合う声も断ち切っていて、騒がしい静寂と静かな喧騒がただよっていました。

「2001」

とんが数字を口にしましたが、その声は静かな喧騒を織りなす要素にすぎないかのようです。

「たった23。でも、数字になっちゃうんだよね。生と死を対立させてしまうと、そうっちゃう」

「うん、わかる気がするよ、とんちゃん。一人だけど二人で、二人だけど一人」

れいはそう言うと、ガラスでできた壁の中にも、色の始まりになりかけた始まりの色

があることに気づきました。そのままガラスの壁を伝うように歩いて角っこまで来ると、そこではガラスの中に二人のひとが立って、外を眺めているようでした。それは名前のないひとで、れいととんでもあることが、騒がしい静寂と静かな喧騒と同じように感じられます。だから、来たほうを振り返ったとき、あの大きな部屋にあったのと同じ木の座の上に一人のひとが立っていて、かたわらに直立したきらきら光る板は、あの二人が眺めている先にたぶんある細長い部屋に立っている**世界に秘密を送り返す**通路につながっていることが、れいにはわかりました。

人生の可能態。そんな言葉が浮かんできます。ありえた生。それが無数にあるとして、現実になるのはその中のたった一つ。れいもとんもその一つなんだと気づいて、れいはそれぞれの一つの向こう側にけっして数字にならないものを感じました。

そのとき、またお花畑がひらひら舞って、一つと一つはそのまま**恩寵**であることを告げてきます。もううっすらとした輪郭にしか見えないとんを見失いたくなくて、れいは**恩寵**を生んだ息吹を追っていきました。

5

笑う顔たちを通り過ぎると、ポンポン、と聞こえないリズムが響いています。細長い部屋でも吹き抜けの部屋でも見た、たくさん色が音楽を奏でていて、**恩寵**をもたらす息吹はそのリズムだ、とれいは思いました。それなら、もうとんを追う必要もないのかもしれない。それでも追いたい。その気持ちが、現実になるたった一つの生であることの証に違いないから、とれいは自分に言い聞かせます。

チリン……チリンチリン。また**鈴**が二つ聞こえています。そちらに向かうと、やはり吹き抜けで一面をガラスの壁で覆われた、でもさっきより狭い部屋に出ました。入って左側の壁では、**始まりの色が色の始まり**になる過程の続きが進んでいます。れいはその行方を目にしたくて、追っていきました。部屋の隅まで来ると、あの**木**が立っていて、**通路**になっています。そこから右を向いてさらに追うと、始まりの色はもう色の始まりになって、色の始まりはもう始まりの色になろうとしていました。そのことがあまりに不思議で、でもあまりに当たり前であることに、れいは啞然とするしかありませんでした。

「れいさん、聞こえないかい？」

来たほうを見ると、うっすらとした輪郭のとんがいました。そばでは、ささやかな儀式が行われているようです。何だろう、と思って近づいてみると、**舟送り**でした。誰かが亡くなったんだろうか？ でも、なぜここで？——次々に疑問が浮かんできたれいを見上げて、うっすらのとんは言いました。

「あの猿も、猪も、鹿も、そして足形の子どもも、みんな歌ってるのが聞こえない？」

そう言われてみて、れいには聞こえる気がします。耳をすましているうちに、歌っているのは猿や猪や鹿や足形の子だけではないことがわかりました。追ってきた始まりの色も色の始まりも歌っている。広い部屋で会ったひとたちも歌っている。そして、とんも、れいも歌っている。うっすらのとんが言います。

「そうさ、ここでは**森羅万象**が歌ってる。だから、この舟送りで舟に乗せられているのも、歌っているすべてなんだ」

その舟送りの様子を眺めていたれいのそばに立っているのは、あの大きな部屋に立っ

ていた**杖**でした。これは墓標かもしれない。歌っているみんなの。つまり、とんの墓標で、れいの墓標。うっすらのとんがポンポンとれいの足を叩きます。れいについてくるように言っているようです。そのままついていくと、さっき二つの鈴が聞こえてきた、ちょうどそのあいだに、また木の**座**がありました。ただ、座とガラスの壁のあいだには大きな部屋にあったのと同じ**ガラス瓶**が置かれていて、生きた**花**が一輪、活けられています。大きな部屋のガラス瓶には無数の小さい小さいしゃぼん玉がおさまっていましたが、この部屋のガラス瓶には一輪の生きた花。それはまるで色の始まりが始まりの色になったようでした。

「また座ってみようか？」

今度はとんが提案し、またれいととんはちょこんと並んで座ります。相変わらずの騒がしい静寂と静かな喧騒の中、二人はいつのまにかお祈りしていました。それは舟送りの舟に乗せられたものたちに向けられた祈りかもしれない。そう考えたれいは、だとしたらこの祈りは**森羅万象**に向けられていることになる、と思いました。そのとき、生と死はもう対立していない。だから、生がよろこびで、死がかなしみ、なんて言うことはもうできない——そんな思いになったれいが横を見ると、うっすらのとんはにっこりしています。そのにっこりは、あの**まぶた**がにっこりしているんだ。だとしたら……。

れいははっとしました。

「そうか、そうだったんだ」

れいは飛び上がるように座から立つと、来たほうに取って返し、上の階に駆け上がっていきました。

6

上の階に着くと、ポンポンのリズムが響く中、目の前には今いた部屋の吹き抜けの空間が広がっていました。下の階と同じ造りの通路になっているその場所と空間のあいだには柵の役目をする手すりが設けられています。そして、その手すりの真ん中より少し右には、**ひと**が一人、静かに立っていて、下に広がる部屋を眺めていました。

「とんちゃん、ずっとこうして見てたんだね。私のことも、ずっと見てくれてたんだね」

れいはそう言うと、通路を先に向かいました。そこでも**二つの生**が近づいたり離れたたり、離れたたり近づいたりして、笑っている女の人の顔がいくつもくしゃくしゃとしていました。とんの姿はれいの目には見えないけれど、お花畑がひらひら舞う**恩寵**が生まれ、ポンポンのリズムが響く中、**世界に秘密を送り返す鏡**に入っていったり出てきたりするのわかります。

きっと、とんの息吹だったのでしょうか。この通路にあるすべては下の階で見たのと同じけど違うし、違うけど同じだということが、れいにはわかりました。**まぶた**はにっこりしています。もうれいは怖くありません。**色の始まりが始まりの色**になるところを見届けなければいけませんでした。

一歩ずつ。一歩ずつ。色が現れる。絡み合う。戯れる。薄れる。溶け消える。抽象的な模様になったかと思うと、懐かしさを感じる海辺や山間の風景になる。水になったかと思うと、土になり、火になり、そして息吹になる。れいはそのすべてとともに呼吸しながら、一歩ずつ、一歩ずつ進んでいきました。行き止まりのように見えるその先では、

ガラスを通して赤や白が明滅しています。それはさっきと同じだけど違うし、違うけど同じ。だから、行き止まりの先に何があるのか、れいにはわかりました。

7

思ったとおり、そこは猿や猪や鹿や足形を残した子どもが、そして土や白の丸玉たちがいる大きな部屋でした。**世界に秘密を送り返す鏡**から出てきたように、れいは驚くこともなく、そのまま先を急ぎます。**色の始まり**はさらに**始まりの色**に移ろい、部屋の奥まで来ると、もう完全に**始まりの色**になっていました。それを確かめると、れいはにっこりして、左を向くと、迷うことなく部屋の奥の中央にある扉に近づき、ぐいっと力を入れて開くなり中に入っていました。

それは世界に秘密を送り返す扉だったのかもしれませんが。ボンボンの聞こえないリズムと呼吸をともにしながら向こう側に出ると、れいは小さな部屋に立っていました。壁際にソファが設えられているのが目に入り、れいは一人ちょこんと座りました。両隣には部屋があるようで、右にも左にも扉があって、ひっきりなしに人が行き来しています。ここは部屋でもあり、通路でもあるようでした。正面には窓があり、目をやると池のある立派な庭園が見えます。

「1625」

数字が聞こえてきましたが、とんの姿はもううっすらとも見えません。れいはとんになりかわった気持ちで「399」という数字を思い浮かべ、とんが言っていた「23」をその横に置きながら、数字にならないけれど数字にするしかないものに思いを馳せました。

すると、目の前にはまた木の**座**があって、その上に**ガラス瓶**が置かれていることに、れいは気づきました。行き来する人たちは目もくれずに通り過ぎていきます。そう、ここは部屋でもあり通路でもあるのでした。今、れいが座っているのは部屋。その部屋は通り過ぎていく人たちにとっては通路。同じだけど違うし、違うけど同じ。そして、この部屋にあるガラス瓶は、狭い吹き抜けの部屋にあった生きた花が活けられたガラス瓶と、同じだけど違うし、違うけど同じ。この部屋にある瓶にも同じように水が張られていて、少しずつ、少しずつ、息吹の中に水が消えて瓶から失われていく。それは、生きた花の中に水が消えて瓶から失われていくのと同じ。

「違うことができない同じ、ということだね」

れいはそう口にしました。うっすらのとんは見あたりませんでした。れいのすぐそばに、大きな部屋にあった、白くてまんまるの**毛玉**がちょこんと座っているのがわかりました。ふわふわでまんまるの毛玉と並んで座るれいは、そのまま何も言わず、息吹と呼吸をともにしながら、ただ座っていました。この部屋を通り過ぎる人はもういません。時計の針はずっと動いていたはずだけれど、針の動きと関わりなく流れている時が、始まりの色から遡っていかなければ色の始まりを見出せない時が、このまんまるの毛玉から遡っていかなければとんに出会えない時が、ここには確かにあることが、れいにはわかりました。

「これが**母型**なんだね、とんちゃん」

「一人か二人かなんて、どっちでもいいことだよ、れいさん。数える、って残酷なことだから」

まんまるのとん玉から聞こえない声が響いてきます。部屋は静けさに覆われて、夕闇のような、それでいて朝もやのような明るさになっていました。その中で、部屋を囲う四つの壁にそれぞれ一つ、**世界に秘密を送り返す鏡**があり、向き合う鏡の対が二つ、縦と横に光の線を描いています。交差した線は、まるで十字架のようで、世界に秘密を届けては送り返していました。

れいはにっこりすると、とん玉に言いました。

「生まれておいで」

すると、まんまるのとん玉にもにっこりが生まれ、れいに答えが返ってきました。

「ぼくはいつでも生まれてこられるさ。だから、れいさん」

「なに？」

れいが答えると、ふわふわのまんまるからは、こんな言葉が聞こえてきたのです。

「生きておいで」

The Story of Rei and Ton

1

Rei woke up. At some point she had fallen asleep. She didn't know where she was, it was dark all around and hard to see anything. Still, Rei felt calm. As she stood, feeling peaceful, her eyes gradually got used to the dark, and she could make out more of what appeared to be a long room. Rei could tell she was standing in the center. Gazing around, she saw small, transparent orbs floating like tiny soap bubbles throughout the dim room, and it didn't seem to be her eyes playing tricks.

Ding... ding ding... it was the sound of a **bell**, coming from both ends of the room. As the sound neared the center where Rei stood, the tones merged into one.

"Ton!"

There was Rei's beloved Ton. She had longed to see him again, but thought she never would. Rei looked and looked again to make sure what she saw was real, but it was unmistakably Ton.

"Rei. Together again at last. Yes, yes."

Rei could have easily wept with joy at the reunion, but in this room, Ton's presence seemed so fitting that Rei simply felt happiness. She embraced her fluffy friend, Ton responded with a ticklish expression, and seemed to be feeling the same simple joy. The two lives joyfully sat down on a nearby **bench**.

As they sat side by side, Rei noticed two white, balloon-like objects floating before them, advancing and receding, moving away and coming closer again. As she watched their whimsical movements, she realized there were many other people in the room, walking around quietly and slowly.

"Ton, I've missed you so much."

"Rei, if you really believe you can meet someone, you will. Would you like to come with me and see where I've been?"

With that, Ton leaped off the bench and walked toward the right side of the room. There the same soap bubbles floated, and there was also a rounded **Clay Tablet**. Rei gazed intently, sensing the tablet was communicating something. But she could not decipher its message, and stayed

rooted to the spot, while Ton, with a determined gait, walked toward the left side of the room.

Rei had no choice but to follow. On the right she saw a slab of **marble**, which also seemed to be saying something. Again Rei could not make out the words, but she could tell it was communicating with the clay tablet they had just seen. She then recalled that there had been a piece of **wood** standing in front of the clay tablet, which might have been an antenna transmitting between the clay tablet and the slab of marble.

Led by Ton, who continued walking without pause, she next came upon a glowing panel. As Rei peered into it, it became difficult to distinguish between this side and that. Had the clay tablet been here, or there? How about the slab of marble? The glowing panel stood in a field of flowers, which seemed to bless both sides equally.

"It might be a **matrix**," Ton remarked.

"A matrix?"

"It's the thing that's the source of everything in this world. It's like a universal template. But it has no form, you can't see or touch it. So I guess it might be a mistake to call it a 'thing.' Yes, yes."

Ton had a habit of speaking his mind and then going silent when it suited him, Rei recalled fondly. Although she didn't understand exactly what he meant, she felt she had some inkling.

"What is this room with a matrix in it? Why is it that I'm able to meet you here?"

Questions bubbled up one after another, but Ton did not answer her directly. Instead, he uttered a single word:

"1999."

What could the number mean? Winking at the puzzled Rei, Ton suddenly dashed from the center of the room towards the left end, opposite from where they had just been. There, more soap bubbles floated, and a small pillow sat nearby.

"It's a **pillow for the dead**. That means the clay tablet and the marble slab must be for the living. Yes, yes."

Satisfied with his own conclusion, Ton headed back toward the middle of the room. Again Rei had no choice but to follow, and she saw the same standing piece of wood, glowing panel, and field of flowers. As they returned to the center, the two round, white, balloon-like objects continued their dance, approaching and receding. Watching them, Rei realized they were **Two Lives**, they were her and Ton. At that moment, she knew that Rei and Ton were both watching and being watched.

"There's a **passage!**" Ton cried out.

"It's a passage to **Return the secret to the world**. Rei, let's go through it together!"

With those words, Ton leapt into the passage, pulling Rei along. Rei realized that until now, everything she had seen in the room had been in monochromatic. This was because, for the first time, she could see a rainbow of colors in the room.

"**Color beginning**. Yes, **color beginning**," Rei thought she heard Ton's voice say.

2

It wasn't clear how they had gotten there, but at the end of the **passage** they emerged into a large room.

"Ah, 1937," Ton said.

Another number. Rei subconsciously subtracted it from the "1999" he had just mentioned, and the number 62 appeared in her mind, followed by other numbers: 400, and 1000, and 2000. Somehow, these numbers seemed to be calling out from various places in the large room. Ton appeared intent on visiting the source of each one, and Rei followed slowly after him.

At the first place they stopped there was a **Monkey**, which had received a letter from the west with a message: "1000." **Wood** and **marble** lay nearby, their elongated shapes like that of the room.

"First it was 1999, now 1000. So, that makes 2999. Or maybe 2937..." Ton speculated, speaking to himself, shifting numbers around. The monkey, perhaps bored of this talk, began to doze off. It walked on all four stubby legs, and resembled a pig at first glance. Looking at the monkey seemed to make Ton drowsy as well. He started to curl up then and there, but he caught himself, shook off the sleepiness, got up and briskly crossed the room diagonally to the next destination.

As they continued walking, they encountered another creature that also looked pig-like at first. Rei quickly identified it as a **Boar**. She wasn't sure how she recognized it so quickly, but she did. Ton was talking to the boar about something. Here too a letter had arrived, this one from the north, indicating "2000." **Wood** and **marble** lay side by side, apparently in communication with the piece of wood that had stood next to the monkey.

"It seems like it's a companion of the **Clay Tablet**."

The conversation seemed to have ended. Ton said to Rei, "I can see that the monkey and the boar both look like pigs and they're part of the same group, but is the clay also part of that group?" Rei didn't know what to make of this, but followed Ton as he led them back along the same diagonal path in the opposite direction. There they found a pale mass. Nearby was more marble and a piece of wood standing with dignity.

"Ah, the boar from just now."

Upon hearing this, Rei looked and saw it was indeed a **Wild Boar Bone**. A letter from the east bore the number "400." She followed Ton, who had started walking back the opposite way once more, and they came across another similar pale mass, with another letter from the east also reading "400."

"Could this be a deer?" Ton asked, looking puzzled. Rei told him that a boar and a deer were different. But a boar bone and a **Deer Bone** are both bones. So, what about bones and stones? They're both white substances, but they're not the same... Rei's head began to spin.

"The same but different, and different but the same. That's it, isn't it?" Ton said matter-of-factly, and moved on. As they retraced their steps diagonally in the opposite direction, their path seemed like that the white, balloon-like objects, advancing and receding, moving away and coming closer again. They came next to a place where they could see a perfectly spherical **Round Clay Ball**, with a hole through the center that seemed perfect for threading a necklace. Imagining herself wearing it, Rei felt she understood that this round clay ball, too, was both the same and different from both the monkey and the deer.

Nodding to himself as if to say "Yes, yes," Ton began to trace another diagonal line in the opposite direction and stopped near the center of the room. However, something caught his eye, and he crouched down and stayed still. Seeing Ton's behavior suddenly change, Rei hurried over.

"Ton, are you okay?"

"Yes. This child must have died young. Someone like a parent, a brother or sister, or friend must have made this **Foot Impression** so they would never be forgotten, and they could always be together. They might have made it into a necklace, like that ball we just saw earlier."

There was a flat mass, and indeed a small footprint could be seen on it. As Ton said, it likely belonged to a child who had died young, their foot pressed into the material to make the impression. Imagining the profound sadness of those around this child, Rei began to feel deep sorrow as if the child had been her own friend.

"But Rei, don't you see? This footprint is related to the clay tablet, and the monkey, the boar, and the ball, they're all connected too. Here, look at this."

Rei saw that there was also a letter from the north, bearing the message "2000." On top of the letter was a fluffy white ball of something like wool, and next to it, a **glass jar** next to a large, smooth white ball. Inside the jar were countless tiny bubbles, smaller than the soap bubbles they had seen earlier.

"Clay, monkey, boar, bone, bone, ball, foot, ball, ball..." Ton murmured as if reciting a spell. There was no telling where this sequence started, where it would end, or if it would end at all. It occurred to Rei that these things in sequence might be connected by the soap bubbles. Just then she realized that there were **eyelids** everywhere in the large room, ceaselessly watching her and Ton as well as the monkey, the boar, the bones, the balls, and the entire sequence.

"Ton, let's sit over there."

Rei had spotted a wooden **seat** along the vertical line bisecting the room, perfectly placed to view the footprint. She called out to Ton, and they sat down together. The bench was smaller than the one in the earlier room, making the **Two Lives** sit almost close enough to touch. It was almost like sitting on the ground, and with only slight movements of the head, they could survey the entire room. While they were watching, they were being watched, and while they were being watched they were watching. The eyelids in the room, like those of Rei and Ton, seemed to be observing the entirety of the endless sequence.

As they faced the footprint, in front of them stood two **sticks**, one diagonally to the right and another close to the footprint on the left. The tall sticks looked like large antennas. This room might function as a kind of communication hub, and that might be why they could see the entire sequence. Lost in these thoughts, Rei felt as if the time sitting side by side with Ton was appearing and disappearing, disappearing only to appear. She wished they could stay like this forever.

How much time had gone by? The large room, which had been softly lit by natural light, had grown dim. Ton, looking languid, stood up and walked toward the back, then jumped up onto a much larger wooden seat than the one they had just been on. He sighed deeply several times. With each of his breaths, Rei saw a scene of a fluttering field of flowers, and she realized it was **Grace**.

Ton then jumped down from the seat and cautiously approached the area where the boar had been. Rei followed and discovered a white ball of **cat fur** lying there. It was so light it seemed it would float away with a breath.

"Clay, round, white... the same but different, different but the same. Hmm."

Ton muttered to himself. After pondering for a while, it seemed like he had understood something. Ton walked toward a long wall nearby and slowly headed along the wall towards the area with the deer bones. Rei had no choice but to follow. Step by step, they reached the far end of the room, where Ton winked at the back wall, turned to Rei, and said:

"Rei, it looks like it's time for the **color beginning**. Let's go see what comes next."

Looking up, Rei felt as if she saw tiny soap bubbles floating. This, too, might be part of a **matrix**.

3

It might have been Ton's breath that carried them. Rei and Ton found themselves in yet another place. It was very different from the two rooms so far, and was filled with cool air.

Country and city. Natural and artificial. Living things and inorganic matter... Various pairs of opposites surfaced in Rei's mind.

"There you go again, thinking about things as opposites!" Ton remarked, as if implying that he could read her mind any time. "In that case, is the **color beginning** also the opposite of something? And what about those two, Rei?"

Looking up, she observed two white, balloon-like objects floating, advancing and receding, moving away and coming closer again. Evidently this place was also a passage. A large number of people were moving back and forth in the space. Glancing at the wall, Rei saw the smiling **Faces** of many women. Each of the faces was crumpled, and when viewed from a different angle they appeared a little sad, but they continued to smile. Rei pondered which was greater, the totality of each one's sorrows or their joys.

"Sorrow and joy also advance and recede, move away and come closer again. But you can hear it too, can't you? A voice saying the **joys were greater**," Ton said, then sighed deeply. A scene of **Grace** in a fluttering field of flowers unfolded. There were small **eyelids** here, and the sensation of being watched while watching, and vice versa, connected the room from before to this place. Rei realized this was what it meant to **Return the secret to the world**.

"Yes, yes, Rei, it looks like you're finally starting to understand," Ton said with a somewhat superior air, which irked Rei. She went to tap Ton lightly on the head, but as if anticipating this, Ton quickly hopped away and playfully scratched Rei's hand.

"Ouch! I just can't win with you, Ton."

The slight pain from the scratch was a joy to Rei.

"Sorrow and joy. They're the same but different, different but the same. Yes, yes," Ton repeated. He seemed also to be speaking of the **Two Lives** that were advancing and receding, moving away and coming closer again. To get a closer look, the two lives named Rei and Ton moved towards the sequence of the color beginning.

4

Artificial but natural, natural but artificial. Distinguishable but indistinguishable. The **Two Lives** watched these ideas ever so gradually merge with the **color beginning**. Looking around, they saw that all the walls were made of glass. When Rei looked at Ton, he seemed as clear as the

glass walls were. Translucent, but she could not see what was on the other side, only light came through. In this bizarre environment, Rei feared Ton might dissolve into it and disappear.

Ding.. ding ding... The **bell** rang again. Thinking it must be the sound of Ton walking, Rei searched for him, as if pursuing the transformation of the color beginning. As she approached the bell, she realized the space had opened up into a room with a high ceiling, a very different place from where she had just been. It was after sunset, and flickering red and white lights could be seen through the glass, likely from neon signs. It seemed to be a city. The colors of the lights were constantly changing, but the sounds of cars and voices that ought to accompany them were muted. It was a loud silence, and a quiet commotion.

"2001." Ton uttered the number, but his voice seemed to be just another part of the quiet tumult.

"Just 23. But it's a number, doesn't it? That's what happens when you make life and death into opposites."

"Yes, Ton, I think I understand. We are one but two, and two but one."

Then she noticed, within the glass walls, the beginning of the color beginning. As she continued walking along the glass wall to the corner, she saw two **humans** inside the glass, gazing outward. They were nameless, but it felt like they were also Rei and Ton, and they were also the loud silence and the quiet commotion. When she looked back the way they had come, she saw a wooden **seat** like the one in the large room, with someone standing on it and a glowing panel standing nearby. She realized that the two figures in the glass must be gazing at the passage to **Return the secret to the world** in the long, narrow room.

Potential aspects of life. These words surfaced in Rei's mind. Among countless possible lives, only one crystallizes in reality. Realizing that this was true of herself and Ton as well, Rei sensed something in each individual life that could not be expressed in numbers.

Just then, the field of flowers fluttered again, each blossom declaring itself to be **Grace**. Not wanting to lose sight of Ton, who had become just a faint outline, Rei followed the breath that had created this Grace.

5

As she passed by the smiling **Faces**, an inaudible rhythm resonated with a soft **pompon** sound. A multitude of colors, like she had seen in the long, narrow room and the high-ceilinged room, struck up a melody, and its rhythm was that of the breath that brought **Grace**, Rei thought. Perhaps there was no need to follow Ton any longer. But still she wanted to follow. Rei told herself that the feeling must be proof of the one and only life that becomes real.

Ding... ding ding... The **bell** rang again. Following the sound, she entered a narrower room than before, with a high ceiling, one side of it a glass wall. On the wall to her left, the process of transformation of the **color beginning** was continuing. Rei was eager to see what lay ahead,

and kept following. When she reached the corner of the room, she found that same piece of **wood** standing, and the room had now become a **passage**. Turning right and continuing, the color beginning had already transformed, and it was about to begin again. It was so incredible and yet so obvious that it left Rei speechless.

"Rei, can't you hear it?" Looking back, she saw the faint outline of Ton. Beside him, a small ceremony appeared to be taking place. Wondering what it was and approaching, she saw it was **Seeing off-boats**. Had someone died? But why here? As questions flooded Rei's mind, the faintly visible Ton spoke.

"Can't you hear them? The monkey, the boar, the deer, the child who left the foot impression, they're all singing."

Now that he said so, Rei felt she could hear it. Listening more intently, she found it wasn't only the animals and the child who were singing. The color beginning they had been following was also singing. The people they had seen in the large room were singing. And so were Ton and Rei. The faintly visible Ton said, "Yes, here the whole universe is singing. So what's being sent off on these boats is also singing."

Standing next to Rei as she watched the seeing-off boat ceremony, was the **stick** that had been in the large room. It might have been a grave marker, maybe for everyone who was singing, and that included both Ton and Rei. The faintly visible Ton tapped Rei's foot, apparently urging her to follow him. They proceeded to a spot between the two places where bells had sounded, and there they found another wooden **seat**. But here, between the seat and the glass wall stood a **glass jar** like the one that had been in the large room, now holding a single live **flower**. The glass jar in the large room had held countless tiny soap bubbles, but this jar contained just one live flower. This was like the transformation of the color beginning.

"Shall we sit down again?" Ton suggested.

They sat side by side together, just as before. As the loud silence and quiet commotion continued, at some point the two found themselves praying. The prayer might have been directed at those seen off on the boats. This would mean, Rei thought, that their prayer was meant for all things in the universe. At that moment, life and death were no longer opposites. So, she could no longer say that life was joy and death was sorrow. Glancing sideways, she saw the faintly visible Ton smiling. If that smile was the **eyelids** smiling, then...

Rei gasped in realization.

"So that's it, that's what it was."

Rei sprang up from the seat, turned around, and hurried back the way they came, dashing up to the upper floor.

Upon reaching the upper floor, Rei was enveloped by the **pompon** rhythm, and the high-ceilinged room unfolded below her. It was structured like the passage below, with a railing serving as a barrier between spaces. Just slightly to the right of the railing's center, a **human** stood silently observing the room below.

"Ton, you've been watching from up here all along, haven't you? And you've been watching over me this whole time, too," Rei said, continuing down the passage. Here too, the **Two Lives** advanced and receded, moving away and coming closer again, and there were countless crumpled **Faces** of smiling women. Rei could not see Ton, but **Grace** emerged from the fluttering field of flowers, and moved in and out of the mirror to **Return the secret to the world** as the pompon rhythm resounded.

It must have been the breath of Ton. Rei realized that everything in this passage was the same but different, different but the same as what she had seen below. The **eyelids** were smiling. No longer afraid, Rei was determined to witness the **color beginning**.

As she went forward step by step, colors appeared, intertwined, frolicked, faded, dissolved, and vanished. What had seemed like abstract patterns gradually evolved into scenes of seashores and mountains, like something familiar from long ago. Water turned into clay, then into fire, and then into breath. Rei breathed together with all these elements, moving ahead step by step. At what seemed like a dead end, red and white lights flickered through glass. The scene was both the same and different, different and the same. And Rei understood what lay beyond the dead end.

As she expected, Rei found herself in a large room, and there were the monkey, the boar, the deer, the child who left the footprint, the clay and the white spheres. It seemed she had emerged from the mirror to **Return the secret to the world**. Unruffled, Rei hurried ahead. The **color beginning** was evolving further, and by the time she reached the back of the room, the transformation was complete. On seeing this, Rei smiled, turned left, and without hesitation, approached a door at the center of the back wall. She pushed it open forcefully and entered.

It might have been a door to return the secret to the world. Breathing along with the inaudible **pompon** rhythm, Rei emerged on the other side and found herself standing in a small room. A sofa was placed against one wall, and Rei sat down lightly, alone. It appeared that there were rooms on either side, with doors to the left and right through which people continuously passed. Apparently this place was both a room and a passage. There was a window in front of her, and looking out, she saw a lovely garden with a pond.

"1625."

She heard the number spoken, but she could no longer see even a faint outline of Ton. Rei

imagined herself to be Ton, and envisioned the number 399, placing it next to the 23 that Ton had spoken of, while thinking about things that cannot be expressed as numbers and yet must be.

Then Rei noticed another wooden **seat** in front of her, with a **glass jar** placed on it. The people who kept passing back and forth paid it no heed. To be sure, this place was both a room and a passage. Where Rei was now sitting was a room, but to the passersby it was a passage. It was the same but different, different but the same. And the glass jar in this room was also filled with water, ever so slowly evaporating into breath. This was the same as when the water was absorbed into the flower and disappeared from the jar in the other room.

"It's the same, it simply can't be different," Rei murmured to herself. No trace of the faint Ton could be seen, but Rei saw, sitting beside her, the round white ball of **cat fur** from the large room. Sitting beside the fluffy ball of fur, Rei did not speak, but simply sat there breathing in sync with the breath, in this room where no one passed by anymore. The hands of the clock must be continuing to move, but here time passed with no regard for the clock's hands. Rei understood it was time that had to be traced backward to the color beginning, and from the fluffy fur ball to find Ton.

"This is a **matrix**, isn't it, Ton?"

"It doesn't matter whether it's one person or two. Counting is a cruel thing."

Rei thought she heard an unspoken voice from the round Ton ball. The room was shrouded in silence, but it glowed with a light like dusk, tinged with the brightness of morning mist. Each of the room's four walls surrounding the room had a mirror to **Return the secret to the world**, and the pairs of mirrors facing each other etched vertical and horizontal lines of light. The intersecting lines were like a cross, sending and returning the secret to the world.

Rei smiled at the Ton ball and said,

"Come and live."

And with that, a smile appeared on the round Ton ball, and an answer came.

"I can always be born anytime. So, Rei..."

"What?" she said.

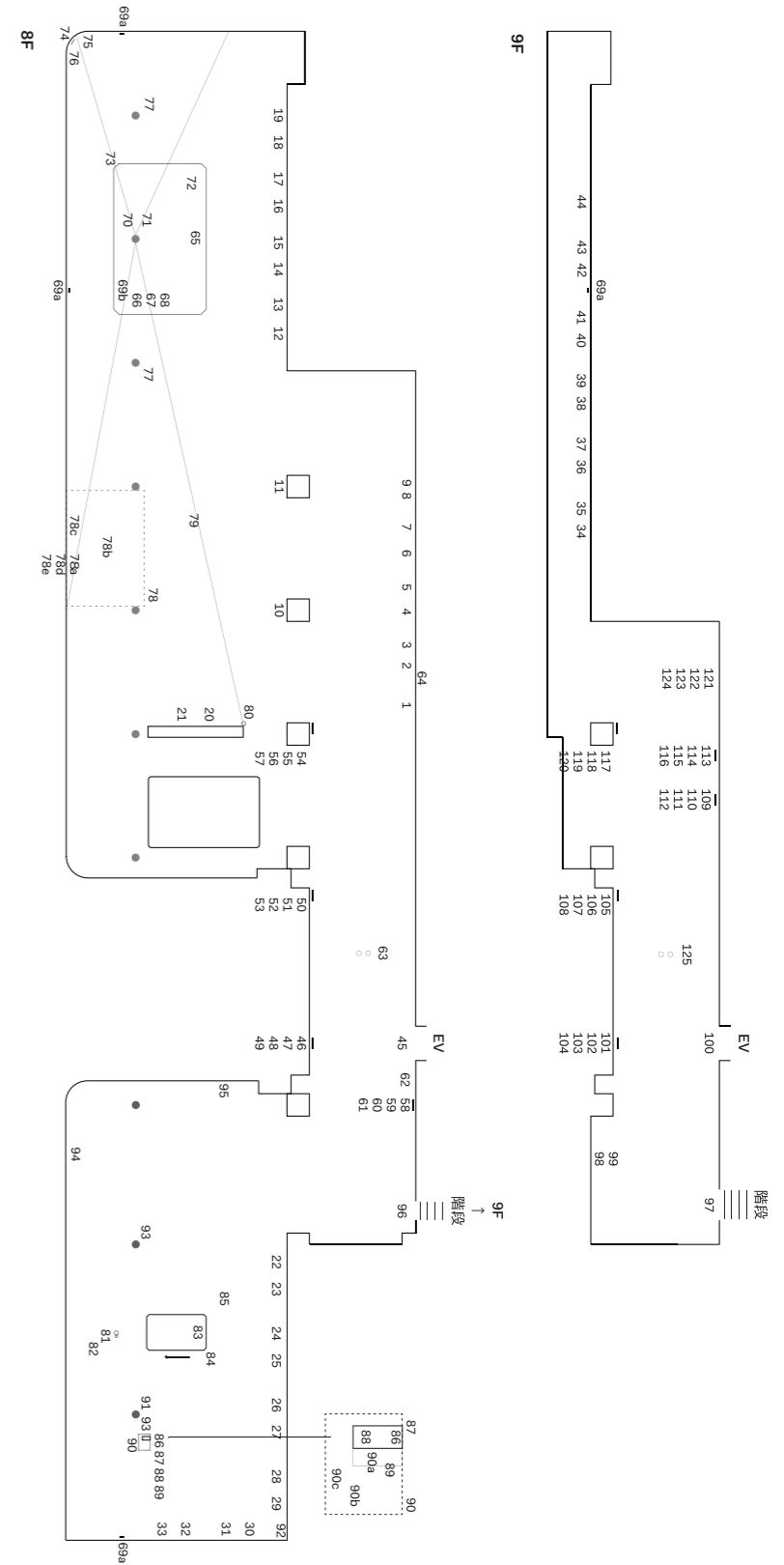
And she heard from the fluffy round ball,

"Go and live."

58 顔（よるこびのほうが大き かったです） <i>Face (the joys were greater)</i> 2024 雑誌、毛糸、糸 magazine, wool yarn, thread 25.6 × 16.7 × 4.3 全長 total length: 52.1	63 <i>Two Lives</i> 2024 空気、風船、テグス air, balloon, nylon thread 各径 14 × 18 (2点組) Φ 14 × 18 each (set of two) 全長 total length: 145.7	69 世界に秘密を送り返す <i>Return the secret to the world</i> 2024	73 まぶた <i>eyelids</i> 2024 紙、糸 <i>paper, thread</i> 1.1 × 1.1 × 6.8	78-a 試し描き <i>color test</i> 2024 キャンバスにアクリル 絵具 acrylic on canvas 29.15 × 90.5	80 無題 <i>untitled</i> 2024 毛糸、糸、ガラス瓶 wool yarn, thread, glass jar (ガラス瓶) 径 7.2 × 8.2 (glass jar) Φ 7.2 × 8.2	85 無題 <i>untitled</i> 2024 ガラスビーズ、テグス glass bead, nylon thread 径 Φ: 1.5 全長 total length: 423	90-a 試し描き <i>color test</i> 2024 キャンバスにアクリル 絵具 acrylic on canvas 19.7 × 8.2	94 恩寵 <i>Grace</i> 2024 プリント布 printed cloth 7.8 × 7.7	100 ボンボン <i>pompon</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 径 Φ: 2.9 全長 total length: 72.5
59 無題 <i>untitled</i> 2024 ガラスビーズ、テグス glass bead, nylon thread 径 Φ: 1.0 全長 total length: 103.7	64 無題 <i>untitled</i> 2024 紙粘土 <i>paper clay</i> 径 Φ: 1.3	69-a 世界に秘密を送り返す <i>Return the secret to the world</i> 鏡 <i>mirror</i> 各径 1 × 0.1 (4点組) Φ 1 × 0.1 each (set of four)	74 座 <i>seat</i> 2024 木 <i>wood</i> 5.4 × 2.0 × 1.0	78-b ボンボン <i>pompon</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 径 Φ: 2.7-3.0 全長 total length: 470	81 無題 <i>untitled</i> 2024 花、水、ガラス瓶 flower, water, glass jar (ガラス瓶) 径 6.5 × 12.0 サイズ可変 (glass jar) Φ 6.5 × 12.0 dimensions variable	86 座 <i>seat</i> 2024 木 (キリ) wood (paulownia) 19.5 × 8.9 × 4.0	90-b 石 (日比谷公園、東京 国立博物館庭園、上野 恩賜公園、ウェールズ) stone (Hibiya Park, Tokyo National Museum Garden, Ueno Park, and Wales)	95 試し描き <i>color test</i> 2024 キャンバスにアクリル 絵具 acrylic on canvas 8.3 × 13.8	101 顔（よるこびのほうが大き かったです） <i>Face (the joys were greater)</i> 2024 雑誌、毛糸、糸 magazine, wool yarn, thread 30.1 × 18.6 × 6.7 全長 total length: 56.2
60 恩寵 <i>Grace</i> 2024 プリント布 printed cloth 7.9 × 7.8	65 座 <i>seat</i> 2024 木 (キリ) wood (paulownia) 410 × 270 × 9	69-b 無題 <i>untitled</i> 大理石、糸 marble, thread 1.2 × 3.2 × 0.5 全長 total length: 695.5	75 ひと <i>human</i> 2021 木にアクリル絵具 acrylic on wood 1.5 × 1.0 × 6.5	78-c 恩寵 <i>Grace</i> 2024 プリント布 printed cloth 8.6 × 8.3 × 0.5	82 無題 <i>untitled</i> 2024 大理石 (マケドニア) marble (Macedonia) 6.0 × 6.2 × 5.8	87 まぶた <i>eyelids</i> 2024 紙、糸 <i>paper, thread</i> 1 × 1 × 3.5	90-c 貝 (日比谷公園、ウェー ルズ) shell (Hibiya Park, Wales)	96 ボンボン <i>pompon</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 径 Φ: 3.0 全長 total length: 96.2	102 無題 <i>untitled</i> 2024 ガラスビーズ、テグス glass bead, nylon thread 径 Φ: 1.0 全長 total length: 106.5
61 世界に秘密を送り返す <i>Return the secret to the world</i> 2024 鏡 <i>mirror</i> 各 7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組) 7.2 × 7.2 × 0.5 each (set of two)	66 人生の可能態 <i>Potential aspects of life</i> 1994 木、鏡、ワイヤー、釘、 フランネル、糸 wood, mirror, wire, nail, flannel, thread 6.2 × 5.7 × 9.3	70 世界に秘密を送り返す <i>Return the secret to the world</i> 2024 鏡 <i>mirror</i> 各 7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組) 7.2 × 7.2 × 0.5 each (set of two)	76 ひと <i>human</i> 2019 - 2020 木にアクリル絵具 acrylic on wood 1.5 × 1.05 × 6.5	78-d 石 (ウェールズ) <i>stone (Wales)</i>	83 座 <i>seat</i> 2024 木 (キリ) wood (paulownia) 100 × 60 × 7.5	88 舟送り <i>Seeing off-boats</i> 2024 土 (日比谷公園)、水、糸 soil (Hibiya Park), water, thread 3.4 × 3.6 × 0.6	91 杖 <i>stick</i> 2024 枝 (日比谷公園) twig (Hibiya Park) 0.9 × 12.8	97 ボンボン <i>pompon</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 径 Φ: 2.8 全長 total length: 72.5	103 恩寵 <i>Grace</i> 2024 プリント布 printed cloth 7.9 × 7.9
62 試し描き <i>color test</i> 2024 キャンバスにアクリル 絵具 acrylic on canvas 10.1 × 13.6	67 恩寵 <i>Grace</i> 2024 プリント布 printed cloth 7.7 × 7.7	71 無題 <i>untitled</i> 2024 ガラスビーズ glass bead 径 Φ: 0.2	77 鈴 <i>bell</i> 2024 鈴、テグス bell, nylon thread 各 1.0 × 1.0 × 1.3 (2点組) each 1.0 × 1.0 × 1.3 (set of two) 全長 total length: 246.5	78-e 無題 <i>untitled</i> 2024 紙粘土 <i>paper clay</i> 径 Φ: 1.3	84 まぶた <i>eyelids</i> 2024 紙、糸 <i>paper, thread</i> 1 × 1 × 6.8	89 舟送り <i>Seeing off-boats</i> 2005 土 (東京 / 広島 / 直島)、 水、糸 soil (Tokyo/Hiroshima/ Naoshima), water, thread 3.6 × 2.5 × 1.1	92 通路 <i>passage</i> 2024 枝 (日比谷公園) twig (Hibiya Park) 4.3 × 12.5 × 11.8	98 座 <i>seat</i> 2024 木 <i>wood</i> 2 × 7.2 × 1	104 世界に秘密を送り返す <i>Return the secret to the world</i> 2024 鏡 <i>mirror</i> 各 7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組) 7.2 × 7.2 × 0.5 each (set of two)
	68 ひと <i>human</i> 2019 - 2020 木にアクリル絵具 acrylic on wood 1.05 × 1.5 × 6.9	72 ボンボン <i>pompon</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 径 Φ: 2.7 全長 total length: 434.3	79 <i>color beginning</i> 2024 毛糸、糸 wool yarn, thread 2001.2 × 490.5 × 338.0			90 無題 <i>untitled</i> 2024 29.3 × 41.6 × 4.3	93 鈴 <i>bell</i> 2024 鈴、テグス bell, nylon thread 各 1.0 × 1.0 × 1.3 (2点組) each 1.0 × 1.0 × 1.3 (set of two) 全長 total length: 246.5		

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 105
顔 (よろこびのほうが大きかったです)
<i>Face (the joys were greater)</i>
2024
雑誌、毛糸、糸
magazine, wool yarn, thread
27.2 × 18.1 × 8.4
全長 total length: 54.6 | 109
顔 (よろこびのほうが大きかったです)
<i>Face (the joys were greater)</i>
2023, 2024
雑誌、毛糸、糸
magazine, wool yarn, thread
19.4 × 26.3 × 7.9
全長 total length: 55.7 | 113
顔 (よろこびのほうが大きかったです)
<i>Face (the joys were greater)</i>
2022, 2024
雑誌、毛糸、糸
magazine, wool yarn, thread
27.3 × 20.1 × 8.3
全長 total length: 78 | 117
顔 (よろこびのほうが大きかったです)
<i>Face (the joys were greater)</i>
2023, 2024
雑誌、毛糸、糸
magazine, wool yarn, thread
25.5 × 16.9 × 8.7
全長 total length: 65.2 | 122
無題 <i>untitled</i>
2024
ガラスビーズ、テグス
glass bead, nylon thread
径Φ: 1.1
全長 total length: 82.0 |
| 106
無題 <i>untitled</i>
2024
ガラスビーズ、テグス
glass bead, nylon thread
径Φ: 1.1
全長 total length: 89.1 | 110
無題 <i>untitled</i>
2024
ガラスビーズ、テグス
glass bead, nylon thread
径Φ: 1.5
全長 total length: 119.2 | 114
無題 <i>untitled</i>
2024
ガラスビーズ、テグス
glass bead, nylon thread
径Φ: 1.0
全長 total length: 129.3 | 118
無題 <i>untitled</i>
2024
ガラスビーズ、テグス
glass bead, nylon thread
径Φ: 1.0
全長 total length: 107.3 | 123
恩寵 <i>Grace</i>
2024
プリント布
printed cloth
7.8 × 7.7 |
| 107
恩寵 <i>Grace</i>
2024
プリント布
printed cloth
8.0 × 8.0 | 111
恩寵 <i>Grace</i>
2024
プリント布
printed cloth
7.7 × 8.1 | 115
恩寵 <i>Grace</i>
2024
プリント布
printed cloth
9 × 7.8 | 119
恩寵 <i>Grace</i>
2024
プリント布
printed cloth
7.9 × 7.9 | 124
世界に秘密を送り返す
<i>Return the secret to the world</i>
2024
鏡 <i>mirror</i>
各7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組)
7.2 × 7.2 × 0.5 each
(set of two) |
| 108
世界に秘密を送り返す
<i>Return the secret to the world</i>
2024
鏡 <i>mirror</i>
各7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組)
7.2 × 7.2 × 0.5 each
(set of two) | 112
世界に秘密を送り返す
<i>Return the secret to the world</i>
2024
鏡 <i>mirror</i>
各7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組)
7.2 × 7.2 × 0.5 each
(set of two) | 116
世界に秘密を送り返す
<i>Return the secret to the world</i>
2024
鏡 <i>mirror</i>
各7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組)
7.2 × 7.2 × 0.5 each
(set of two) | 120
世界に秘密を送り返す
<i>Return the secret to the world</i>
2024
鏡 <i>mirror</i>
各7.2 × 7.2 × 0.5 (2点組)
7.2 × 7.2 × 0.5 each
(set of two) | 125
<i>Two Lives</i>
2024
空気、風船、テグス
air, balloon, nylon thread
各径14 × 18 (2点組)
Φ 14 × 18 each
(set of two)
全長 total length: 125.4 |
| | | | 121
無題 <i>untitled</i>
2024
紙、糸 <i>paper, thread</i>
3.5 × 4.0 × 2.2
全長 total length: 56.2 | |

- ・65《座》には、お座りいただけます。靴はお脱ぎください。
- ・83《座》にはお座りいただけます。矢印の方向にお座りください。靴はお脱ぎください。
- ・48, 52, 56, 60, 94, 103, 107, 111, 115, 119, 123《恩寵》には息を吹きかけることができます。
- ・80《無題》(毛糸、糸、ガラス瓶)は、手にとって横に揺らしてご覧いただくことができます。
- ・You can sit on no. 65, seat. Please take your shoes off.
- ・You can sit on no. 83, seat. Please take your shoes off, and sit facing the direction of the arrow.
- ・You can blow on no. 48, 52, 56, 60, 94, 103, 107, 111, 115, 119, 123 *Grace*.
- ・You can take no. 80, *untitled* (wool yarn, thread, glass jar) in your hand and sway it gently.



内藤礼 生まれておいで 生きておいで

2024年9月7日(土) - 2025年1月13日(月・祝)

※休館日: 水曜日、2024年10月24日(木)、12月30日(月) - 2025年1月3日(金)

[展覧会]

主催: エルメス財団

会場: 銀座メゾンエルメス フォーラム

特別協力: 東京国立博物館

協力: タカ・イシイギャラリー

[エルメス財団]

理事長: オリヴィエ・フルニエ

ディレクター: ローラン・ペジョー

プロジェクト主任: ジュリー・アルノー

プロジェクト・マネージャー: ヴィクトリア・ル・ゲルン

コミュニケーション主任: アナイス・ケーニッヒ

[エルメスジャポン株式会社]

代表取締役社長: 有賀昌男

コミュニケーション担当 バイスプレジデント: 亀井誠一

キュレーター: 説田礼子

制作: 有川愛彩、田辺裕子、秋本真弥子

設営: HIGURE17-15cas

[カタログ]

アート・ディレクション: 須山悠里

デザイン: 須山悠里、小河原美波

編集協力: 柴原聡子、橋場麻衣

撮影: 畠山直哉 (明記以外)、高橋健治 (11-13頁、26-29頁、44-46頁)

執筆: 内藤礼 (50頁)、説田礼子 (54-60頁)、互盛央 (68-77頁)

英語訳: クリストファー・ステイヴンズ (明記以外)、西田英恵 (51頁)

制作・発行: エルメス財団

印刷: 株式会社八紘美術

禁無断転載

銀座メゾンエルメス フォーラム

〒104-0061 東京都中央区銀座5-4-1 8・9階

Tel. 03-3569-3300

Rei Naito: come and live - go and live

7 September (Saturday), 2024 - 13 January (Monday/public holiday), 2025

*Closed: Wednesdays, 24 October (Thursday), 30 December (Monday), 2024 to 3 January (Friday), 2025

Exhibition:

Organized by: Fondation d'entreprise Hermès

Venue: Ginza Maison Hermès Le Forum

With the special support of: Tokyo National Museum

With the assistance of: Taka Ishii Gallery

Fondation d'entreprise Hermès:

President: Olivier Fournier

Director: Laurent Pejoux

Head of projects: Julie Arnaud

Projects manager: Victoria Le Guern

Head of communication: Anaïs Koenig

Hermès Japon Co., Ltd.:

President: Masao Ariga

Vice president communication: Seiichi Kamei

Curator: Reiko Setsuda

Production: Aisa Arikawa, Hiroko Tanabe, Mayako Akimoto

Exhibition installation: HIGURE17-15cas

Publication:

Art director: Yuri Suyama

Design: Yuri Suyama, Minami Ogahara

Editorial cooperation: Satoko Shibahara, Mai Hashiba

Photo: Naoya Hatakeyama (except as noted), Kenji Takahashi (pp. 11-13, 26-29, 44-46)

Text: Rei Naito (p. 50), Reiko Setsuda (pp. 54-60), Morio Tagai (pp. 68-77)

Translation from Japanese: Christopher Stephens (except as noted),

Hanae Nishida (p. 51)

Produced and published by Fondation d'entreprise Hermès

Printed in Japan by HAKKO Bijutsu Co., Ltd.

© 2024 Fondation d'entreprise Hermès

All Rights Reserved.

Ginza Maison Hermès Le Forum

8F/9F, 5-4-1, Ginza, Chuo-ku, Tokyo 104-0061

Tel. +81 (0)3-3569-3300